

武蔵野市学校・家庭・地域の協働体制検討委員会
(第3回)
議事録

日時：令和3年12月16日（木）

場所：武蔵野市役所 東棟8階 802会議室

武蔵野市学校・家庭・地域の協働体制検討委員会（第3回）

○日 時 令和3年12月16日（木） 午後6時～午後8時34分

○場 所 武蔵野市役所 東棟8階 802会議室

○出席委員 有村委員長、渡邊副委員長、助友委員、宮崎委員、河合委員、高丸委員、
田代委員、藤平委員、松田委員、高橋委員、矢島委員、北島委員、
守谷委員、島田委員、横山委員、勝又委員、樋爪委員

○欠席委員 なし

○事務局 市民活動推進課長、地域支援課長、児童青少年課長、
生涯学習スポーツ課長、指導課長、統括指導主事ほか

1 開 会

【指導課長】

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

開会に先立ちまして、配付資料の確認をさせていただきます。

配付資料は、次第と資料1、資料2でございます。資料右上に資料番号がございます。事前にメールで送付させていただいた資料と同じものですが、ご確認ください。また、本日の資料とは別に第2回検討委員会の議事録を配付しております。既にホームページにも掲載しておりますが、事前の確認の際にはご協力いただき、ありがとうございました。併せて、第2回の検討委員会を傍聴された方からのアンケートについても参考資料として配付させていただきます。

さらに、指導課教育推進室でこの間作成しました「地域と学校の協働通信」第6号を机上に配付させていただいております。今回の委員会の検討がスタートしたということで、この検討委員会と関わる内容となっておりますので、参考として置かせていただきました。よろ

しくお願いいたします。

では、これから委員会を始めさせていただきますけれども、委員会の内容については、記録用に録音・録画させていただいておりますことをあらかじめご了承願います。

また、前回同様ですが、本検討委員会にはオンラインで参加される委員もいらっしゃいますので、ご発言いただく際はマイクを使用いただき、お名前をおっしゃっていただいておりますようお願いいたします。

それでは、ここからの進行は委員長にお願いしたいと思います。委員長、よろしくお願いいたします。

【委員長】

それでは、今日は全員お集まりということで非常にうれしく思っております。ただいまより第3回学校・家庭・地域の協働体制検討委員会を始めたいと思っております。

2 議 事

(1) 学校・家庭・地域の連携・協働に関する協議

【委員長】

早速、議事に入りたいと思います。

本日は、資料について事務局から説明いただいて、その後に委員の皆さんからのご意見をいただければというふうに思っております。

事務局のほうから事前に資料も送られて、皆さん、お目通しいただけていると思いますので、改めてお聞きいただいて、活発な議論ができればいいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、事務局、よろしくお願いいたします。

【指導課長】

それでは、資料1「これまでの検討状況及び第3回検討委員会で検討していただきたい点(検討テーマ別)」についてご説明いたします。

こちらは第3回目でご議論いただきたいポイントを検討テーマ別に整理した資料となります。各検討テーマの右側には、第1回検討委員会で皆様からいただいたご意見をその要素として記載しています。第2回検討委員会では、この検討テーマに基づいて、改めて皆様からご意見を伺いました。テーマごとに検討を行ったわけではありませんが、いただいたご意

見を検討テーマ別に分類し、各検討テーマから下に伸びる矢印の途中と先に記載しています。矢印の途中には検討テーマを補強するような現状や課題に関する意見を記載しており、矢印の先には検討テーマの回答となるようなご意見を記載しています。検討テーマの2や3のように検討テーマの回答となるようなご意見を多くいただいた項目と、1や4のようにもう少し皆様からご意見をいただきたい項目とがございました。

検討テーマ①「これからの学校が子どものために大切にしていきたい機能は」については、飽和状態であるという学校の現状や、何が忙しくてどんな支援が必要か分からないといった地域側の現状についてお話しいただき、検討テーマである学校が子どものために大切にしていきたい機能に直結するご意見としては、先生方には子どもをよく見てほしいことや子どもたち自身の声を拾うことなどのご意見をいただきました。本日はさらに専門性を生かすといった視点や諦めることも考えなければならないといった視点で、学校（教員）の大切にしていきたい機能に特化するために、何を減らす、分けるのかについて、もう少し皆様からご意見をいただきたいと考えております。

検討テーマ②「子どもの学びや体験活動を充実させるために何が必要か」については、システムとしてサポートしていくこと、強みをうまくコーディネートすること、継続性や多様性が必要であることなど具体的なご意見をいただきました。

検討テーマ③「立場が異なる関係者のベクトルを合わせ、ゴールを共有する仕組みや方法は」については、情報発信や信頼関係が重要であること、開かれた学校づくり協議会を充実することなど具体的なご意見をいただきました。

検討テーマ④「負担の軽減と主体的な参画を促すきっかけづくり」については、リソースの開放や活動の満足感が次のモチベーションにつながることなどのご意見をいただきましたが、検討テーマそのものをもう少し具体的に掘り下げる形でご意見をいただきたいと思っております。

各検討テーマについて、個別にご意見をいただいた後、全体を総括した議論をいただくため、資料の一番下に「これら全体を実現するための仕組みづくり」と記載させていただいております。検討テーマを横断する形で全体的なイメージを深められるよう、最後にこちらもご議論いただきたいと思っております。

続いて、資料2についてご説明いたします。

こちらは資料1に抜粋した意見だけではなく、第2回検討委員会で皆様からいただいたご意見全体を検討テーマ別に分類した資料となっております。本日の議論の参考としてい

ただければと思っております。

資料の説明は以上となります。よろしくご議論のほどお願いいたします。

【委員長】

ありがとうございました。

非常に中身の濃い資料でございますので、皆さんにいろいろ見ていただいて、今、指導課長からも説明ございましたけれども、検討テーマの1から4について、それぞれ現状と課題、そして、方向性、それから、意見についてそこに記してございまして、非常に分かりやすい構造になったなというふうに思っているところでございます。

皆さんにこれを見ながら、今、説明いただいた段階でございますので、まずご質問とかこのところはどうかという基本的な質問といたしますか、もしあればいただけるとありがたいなというふうに思いますので、検討テーマの1から4をそれぞれ見ていただいて、この点をもうちょっと詳しく知りたいとか、この点はどうかというご質問があったらお願いしたいと思っております。

ちょっと時間を置きますので、ご覧いただいて挙手をお願いいたします。

いかがでしょうか。

【委員】

今日の議論の進め方の確認だけさせていただきたいんですけども、資料1のところは第3回の委員会で検討していただきたい点というところが、テーマ1とテーマ4のところだけについているんですけど、今日の会議では、検討テーマ1と4について中心にという考え方でよろしいのでしょうか。

【委員長】

先ほど指導課長から説明がありましたように、2と3については、方向性となる意見が、ほぼ出ているんじゃないかという見通しもあって、もし付け加えることがあったら、当然2と3もいいわけですけど、時間的なこともあって、1と4を中心に皆さんに議論いただいて、具体的な課題や方向性をいろいろ出してもらったらいんじゃないかということですね。当然、どの検討テーマも関連があると思うんですね。そこらあたりも踏まえながら、そういう意味で、一番下に「これら全体を実現（達成）するための仕組みづくり」というふうに書いてございますが、これは今、横にそれぞれ項目でなっているわけですけど、多分、私たちは機能的に考えて、縦に通して串刺しにしたときにどんなふうな考え方や仕組みがあるんだろうかというのをある意味では考えることも必要なのかなということだと思っ

ですね。そこは皆さんで議論しながら検討していただきたいというふうに思っていますが、今、委員からご指摘あった点について申し上げますと、本日は1と4について重点的に検討したいというのが今日の課題ということになると思いますが、いかがでしょうか。

【委員】

委員長がおっしゃったように、関連するところがあるので、例えば4について話をするときにも、当然、3とか2とかに縦串で絡んでくるところがあるので、その視点にあまりクローズアップしてしまうと、俯瞰的な要素がちょっと抜けてしまうといけないので、そのあたりは、どの検討テーマに入るところも関連して話すということは妨げないということでもよろしいですね。

【委員長】

そうですね。それでいいと思います。これだけのメンバーですので、いろんなお立場の方がそれぞれ専門セクションでお出になっていますので、自分はここのところはかなり意見があるが、ここのところはちょっと言いにくいとかあると思うので、1と4にかかわらず、2と3でこういう点が問題だとどんどん遠慮なくおっしゃっていただければと思います。主に1と4というふうには一応進行上は進めております。

よろしいでしょうか。今のご質問をいただいたおかげで、私も頭の中が整理できた感じがしたんですけど、いかがでしょうか。

ほぼ大体そういう進め方でよろしいでしょうか。今のように進め方とか議論の仕方を聞きたいということがあったらおっしゃっていただければありがたいんですが。

それでは、やりながらまた戻ってもいいと思いますので、よろしく申し上げます。

それでは、まず議事の(1)のところ、学校・家庭・地域の連携・協働に関する協議に進みたいというふうに思っております。

まずテーマ1に関して、学校(教員)の大切にしていきたい機能に特化する、何を減らすのかということですね。大切にしていきたい機能ということでございますので、それが課題になっておりますけれども、これについて、現状としては、先生方が非常に忙しいんじゃないとか、地域の方も忙しいんじゃないかという、多忙になっていること、働き方改革というのをここ何年か言われてきたわけですけれども、何を大切に、何を減らすのか。第2回の検討委員会でもご意見があったところでございますので、専門性を生かすという点も含めて、何を諦めるかというか、ある意味では削減ということも、スクラップ・アンド・ビルドの発想も必要だろうというふうに思いますので、よろしくお願ひしたいと思うんで

すけれども。

まず第1のところ、ちょっとくどくなりまして恐縮なんですけれども、学校（教員）が大切にしている機能に特化するために何を減らすか、分けるという論点から、まず現状、課題、そして、方向性、特に方向性では、学校の先生方には1人1人の子どもたちをよく見てもらいたいと、これは教育論の基本に関することだと思いますね。そういうことの見解が出されております。それから、子どもたち自身が何をしたらいいか、声をどのように拾っていくのか、そういった視点がありますよということですね。それを踏まえた意味で、何を減らしたり、うちの子は何をさせるのかということについて検討したいということでございます。

ちょっとくどく申し上げて大変恐縮だったんですけれども、皆さんからそれぞれご自分のお考えの中で、こういうふうに関能させるために、特化させるために、分けたり減らしたりしたらいいんじゃないかという案をいただくとありがたいというふうに思っておりますけど、いかがでしょうか。どうぞ自由にお願いたします。

【委員】

先生の多忙化というところで、私も随分前から聞いてはいるんですけど、何が忙しいのかということが、なかなか腹を割って話せないところもあって、表向きの忙しさはよく聞くんですけど、実のところ、どこが本当に忙しいのか、忙しさの根本原因というんですか、そこはなかなか言いにくいのかもしれないんですけど、ここが根本だという忙しさの根本はどこというのは、我々はちょっと見えないところがあります。例えば、見えるのは、個人情報とかセキュリティの問題で、個人情報を守らなきゃいけないから、なかなか仕事がやりにくいとかそういうかなんていう感じはするんですけど、本当のところはどうなのかなというところで、もし差し支えないところで忙しさの根本的なところを教えていただけたら助かります。

【委員長】

どうでしょうか。ほかの地域やご家庭の皆さんで同じような意見があったら、どうぞお願いしたいと思うんですけど。

【委員】

資料をまとめていただきまして、ありがとうございます。

1番のテーマについて、今、委員のほうからもお話ありましたけれども、本当に先生が何をされているかがよく分からない。逆に言えば、一般の会社だと、多くのところがやってい

と思うんですけども、業務分析というのをしていると思うんですね。そんなものがあった、これがいい、これを外すとか、そういうふうな話になれば前に進むのかなど。今、この中ではちょっと難しいんじゃないかなというような気がしますので、ちょっと提案いたします。

【委員長】

会社だと業務分析みたいなものがあるけど、学校ではどうなっているのかというあたりですよ。

ほかにどうでしょうか。ございますか。

【委員】

今と関連して、業務的なこともそうですけれども、子どもの人数、教室の人数とか、それから、先生の2人体制とか、そういう工夫で何とかなるのか、そのところもお聞きしたいと思います。

【委員長】

人数の問題、教員の問題ですね。ありがとうございます。非常にわかりやすい課題を出していただきまして。

ほかにございますか。

では、もしよろしかったら、学校関係の校長先生方から、今の点で。

【委員】

学校の忙しさについて考えたとき、量的なものとか質的なものとか、あるいは情意的なものというのかな。私は、教員の働きがいというのがすごい大事だと思っているんです。忙しさが悪いのかということ、必ずしもそうではない。度を越したら別ですよ。だけど、忙しくても、自分たちがやっている教育活動なり教員としての職務がすごくやりがいがあるなどというふうに感じられていれば、それはどっちかということ充実のほうに傾くのかなと思うんです、一定の範囲です。重ねて言いますが、ここ何年か本校の教員なんかを見ると、私はそういう傾向があるのかな、というふうに思っています。

ここのテーマ①の方向性となる意見の長い四角の下のほうに、子どもたち自身が何をしたいか、声をどう拾っていくかということであれば、一生懸命そういうことを本校では大切にしてやっているつもりなんですね。それが実現できる、それに教員も喜びを感じるというようなところ、それに地域の人が応えてくれたり、あるいは保護者の方がすごくこれはいい活動だったと言っていたり、そういう充実感というのはすごい感じているのかなと

いうふうに思っているんですね。ですので、新しいことや大変なことがあるから、それがいけないということではないんだなということが1つは言いたいのと、もう一つ、何人かの方がおっしゃったように、先生たちが忙しいというけど、何が忙しいのか、あるいはどうしているのかとか、どんな仕事をしているのかというのはわからないですよ。

中学生の職場体験というのがありますね。多くの学校でこれは全国的にやっていますけれども、学校に来た子どもたち、卒業した子どもたちが多いんですけれども、先生がこんなに忙しいとは思わなかったと。迷惑かけていたなとかと言うわけですよ。子どもたちが見る姿というのは、朝来たときに先生がいて、帰るときにも先生がいて、僕たちが帰ったら、先生はきっとおうちに帰っているのかなとかと思っているわけだけど、それ以外のことが非常に多いわけですよ。まだうちの学校は実施していないんですけど、副校長なんかとしゃべっているのは、保護者の方とかPTAの広報委員の方とかに、1日教員の後ろについて、シャドーイングというんですか、そういうのがありますよね。1日特定の先生についてもらって、この先生が1日何をしているのかというのを見てもらったいいんじゃないかと思うんですね。すごい苦痛だと思いますけども、ただ、条件としては、そこで見聞きしたことは個人情報だから、それは一切口外しないと。ただ、職務という点で実感してもらおうというのは、僕はいいいのかなと思っていて、もし皆さんの中でご希望があれば検討したいと思いますので、声がけいただければというふうに思います。

確かに表面的に何となく学校の先生のお仕事というのをイメージしていると、そうではない部分、単に書類の作成とかだけではなくて、ここに一人一人の子どもをよく見てもらいたいとあるんだけど、一人一人の中にはとても時間がかかる、それを繰り返し繰り返しやっていくことによって、その子の状況がよくなってくんじゃないかという、そういうものについて、ご家庭と何度も何度も連絡を取ったり、関係機関と様々な電話があったり、直接面談をしたりとか。そうすると、すぐ2時間とか1回でかかっちゃうわけですよ。ですので、そういうことも含めて、教員というのがどういう仕事をしているのかというのは、見てもらう必要があるんだろうな。今、私が言ったのは1つの大胆な考えですけど、傍聴者のアンケートに学校の壁が固すぎると書いてあるんですね。そういうふうに見えるわけですよ。見えているのは事実なわけですよ。なので、そのところが1つの大きな課題でもあるんだろうなというふうには思っています。

学校というのは、基本的に誰でも経験していて、誰もが我が子がいれば、そこに通わせるものじゃないですか。いまだに学校の壁が固いというふうに見られていること自体が課題

なのかなというふうに思っています。

そういった意味で、いろいろな方法を使って、ただ、それに対して、学校が発信してくれないということを言っている、それはちょっと厳しいよと。前回もちょっとそういう話は出ましたけれども、学校からの発信をただ待っている、それでわからないというふうに言ってもらっても、正直言って困っちゃうかなというところもあるので、お互いにそのところは意見が出せるといいかなと思います。

さらに、長くなっちゃって申しわけないですけど、子どもたち自身がというところでは、親御さんとか地域の方とか、子どもと一緒に今の生活だとか勉強のことだとかを議論するという、そういう場はあってもいいのかなというふうに思います。もしかしたら、本校の研究発表会に来ていただいたり、あるいは動画を見ていただいた方もいらっしゃるかもしれません。パネルディスカッションを見ていただくと、6年生が4人、全く台本なしで出ていて、結構なことを言っているんですね。私もびっくりしました。ですので、聞いていけば、子どもたちの声というのは、あれは非常にフォーマルな中でやっていますけれども、出てくるのかなと。子どもにはそういう力があるんじゃないかなというふうに思っている、子どもを巻き込みながら何かやっていくといいのかなというふうに思っています。

ちょっとまとまりませんが、そんなことを今、考えました。

【委員長】

非常に学校の現状をわかりやすくお話しいただいたように思います。

ほかの学校の先生から、どうぞありましたら。

せっかくですから、校長先生、副校長先生がいらっしゃるの、4人に伺ったほうがよいですね。

【委員】

今、校長先生がお話しされたのですが、質問にあった、学校が何をされているのかよくわからないとか、教師が忙しいのが見えないことについては、多分、忙しいというのは、どの仕事もみんな忙しいといえそうです。ただ、なかなか学校というのは見えづらい組織であるのも事実。それから、先ほど話に出たように、分担の話がありますが、教育で分担していくというのは非常に難しいと思います。私もよく職員に話すことですが、教育は工場生産のように1つ1つパーツを重ねていって、完成するというものではありません。様々に関わり合う中で子供たちが育っていきますから、簡単にここをこうすればよくなるわけではありません。しっかり内容等を吟味した上で、分担しないと難しさがあると思っています。

それから、時代とともに学校で求められるものが大きくなってきています。というのは、皆様ご存じのように、皆で学校をよくしようとするから、〇〇教育というのが学校にどんどん入ってきます。あれもしよう、これもしようとなります。学校というのは、学力を高めたり、仲間とかかわったり、社会性を身につけたりと、様々なことを学ぶ場だと思っています。そして、教師が子どもたちに寄り添ってという部分が、大切な仕事だと私は常々思っています。ただ、こういう社会の中ですから、様々な事件が起これば、必要ではありますですがすぐに調査だとか、それから、〇〇教育、例えば薬物がはやれば薬物防止のプログラムをつくらうじゃないか、いじめがあればこうしようじゃないかなど、今、様々抱えています。そして、どれもいいことだから、学校はそれを大切にしてください、膨らんでいき、教師たちもそれで苦しんでいるという現状があると思っています。

だから、事務作業なども増えてきて、私が若かったころに比べると、今の教員は大変な中で勤めているんだなと思ったりもしています。

スクラップ&ビルドという言葉がありますが、教育の中ではスクラップする難しさがあるということは伝えさせていただきたいと思います。

【委員】

今、何が忙しいか分からないということをおっしゃってくださっていますけれども、その言葉が本質だと思っています。つまり、教員も何が忙しいか分からないくらい一日詰まって、これがその本質的なところなのかなというふうに思います。

多分そういう質問が出るだろうなと思って考えたときに、何か調査が多いのかなというふうに思ったんですね。国とか市とかどこかからの調査が多いのかなと思ったときに、前職、私、市の教育委員会におりましたので、その中で調べたことがあります。市役所の中の各課にどんな調査を学校にかけていますかとかけたら、200個ありました。市だけで200個あったんですね。じゃ、200個の中で削れるものはありますかということも聞いたんです。10%もなかったですね。だから、なかなかそれを削っていくというのは、そちらさんもお仕事でやっていることだから、そこは削ることができないものだ、これはどうしても削れないですということをおっしゃっている。調査する側の人たちからしても、それは我々の仕事だから聞かせてほしいということをやっているものだから、なかなかこれは削れないんだなということを感じました。

その調査のところを削っていくということも確かに必要なことかもしれませんが、ただ、これは多分、ここの委員会でやる本質的な議論ではないと思いますので、それは市の中で検討

していただければいいかなというふうに思います。

次に、今、委員がおっしゃっていた〇〇教育、確かに増えていると思います。昔、ちょっと調べたことがあったんです。平成27年、東京都が多様な教育課題に対応するためのカリキュラムモデルという冊子をつくっていたんですね。その中で、平成27年の段階で〇〇教育というのは28個あったんですよ。しかも、最後は「等」と書いてあるので、じゃ、終わらないな、これはという。27年の段階で28個ということは、もうそこから5年以上たっているわけですから、さらに増えているというところはあると思います。これら全てに对应していたらパンクするというのは当然だと思います。これは私の考えなんですけど、そこから減らすことができなくても、学校は選ぶ必要があるかなというふうにはすごく考えています。地域の特色、例えば、本校の場合はむらさき学級やいぶき学級という特別支援学級を併設しておりますので、そういった特支に関すること、障害に関することであるとか、福祉に関することとか、そういったことに特化するということは考えられるでしょうし、学校が自分たちの地域というところに特化して、そういったものを選んでいくということをやっけていかなきゃいけない時代なんじゃないかな。そうしないことには、全てに関わろうとしたら、先ほど委員がおっしゃったように、飽和してしまう。これは無理ですから、そういったところを選ぶということは学校には必要なんじゃないかなと考えているのが1つです。

もう一つ、私は大体7時ぐらいに出勤しているんですけども、7時の段階ではちらほらと教員が来るわけですね。学校の授業の準備したりとかするわけですよ。そこから始まって、教員は1、2、3、4と授業をやっていきますよね。給食の時間も給食指導がありますから休憩時間ではない。その後、掃除の時間があって、5時間目、6時間目があって、さあ、子どもたちが帰って、ようやくここで教員の休憩時間も45分確保されているんですけども、そこにいろいろと会議が入ってきたりとか、保護者の方に今日けがしちゃったから電話しなきゃいけないとか、いろいろな対応が入ってくるんですね。結果、そうすると、退勤時間の15分ぐらい前になって、本校では職員夕会という形でやっておりますけれども、夕会があると。その後に中学校だったら部活動なんかがあったりするんでしょうね。小学校はその後、教員同士でもいろいろと打ち合わせしたりとか、授業の準備をしていたら、気がついたら6時、7時、遅ければ8時という形になっていく。これが教員の日常的生活なのかもしれません。日常的と言ってしまうと語弊があるかもしれませんが。

そういった形を考えたときに、時間の使い方ということが非常に教員は厳しいものがある。じゃ、これをどうやったら変えていけるのかというところなんですけれども、1つ、コ

コロナの状況下で、一つ一つの業務の見直しということもありましたし、もう一つ、我々の新しい武器として、1人1台のクロームブックが教員にも配られました。タブレットの活用というところも非常に大きな武器なのではないかなというふうに思っております。本校の場合もクロームブックが教員に1人1台入ったことによって、教員の伝達事項もその中でできる限り完結しましょうといったことを話しております。また、会議なんかもオンラインを使ってやれるものはオンラインでやりましょうとか、あとは、これは各校やっておりますけれども、欠席連絡なんかもフォームを使ってやりましょうとか、アンケートもそういったものを使ってやりましょうと、そういったところで削減できるものは削減できるようになってきているというところがあるのかなというふうに思います。

そういったところでいくと、オンラインへの対応ということも使っていくと、少しずつの削減ということが出来るのかなというふうに思います。選ぶということと、オンラインを活用するということが、そして、ごめんなさい。さっき言い忘れたんですけど、選んだときに、地域の方にそこに協力してもらおうと私はいいのかなというふうに思うんですね。選ぶものも地域に特化したものを学校は選んでいけると、よりその学校のニーズに合ったものになっていくのかななんていうふうに思っております。

【委員】

3人の委員の方々がきちんと話をしてくれたので、私は何を言えばいいのかなと思うんですけど。基本的に言っていた○○教育というのがどんどん学校に押し寄せてきているのは否めない事実ですね。今、委員が言ってくれたように、それをその学校に合ったものを選択していくとか工夫して少しでも減らしていく方法はないのかなと思っています。また、先ほど委員から言われた子どもの人数に対する教員の数というのは、ぜひ増やしてほしいですね。先生方の一日は、朝8時25分前には生徒が登校して、午前中は8時45分から、12時35分まで授業があるんですね。そして、12時40分から給食準備をして、1時5分には給食が終わり、昼休みがあって、1時半からまた午後の授業となります。6時間目は、3時20分までで、帰りの学活、掃除をやって4時近く。本当は3時50分から休憩時間となりますが、その後、委員会とか部活がありますから、4時50分までの勤務時間を超過することは否めません。先生方のどこが忙しいのかと言われると、これなのかなと思うんですね。これがどういうふうに分担できるのかとか、一応、学校の先生は授業を教える、勉学を教えるのが主だと思いますので、それと、あともう一つは生徒を育成していく、子どもたちに、人間性を育てていきたいので、そういうものがあると、やっぱり1人1人見ていきたいですよ

ね。子どもたちを1人1人見るには、やっぱりいろんな人の目を見たほうがいいじゃないですか。それには人数が多いほうがいいなというのはたしかなんですよね。予算とかいろいろなものがあるんでしょうから、ちょっとその辺のところはうまくいかないのかもしれませんが、ではこの部分をどうやって仕分けしていけばいいのかということ、さっきからずっと考えていたんですけど、なかなか妙案が思いつきません。部活動と学習支援教室、これについては仕分けをしたいというのはあるんですけどね。このごろニュースで、ある区の部活動のやり方について報道がありましたけど、武蔵野市は武蔵野市のやり方があっていいのかなと思っています。子どもと一緒に汗を流したいという先生方もいる。部活をやりたいから学校の先生になったという人も一部いますから。授業を大事にしながら部活動にも頑張っている先生方もいるんですよね。だから、そういう先生方から部活動を取り上げる必要はないんだけど、自分の得意ではないものを押しつけられるということはなくしていきたい。先生方が自分の授業の準備の時間を確保しながら、子どもたちといろいろとかかわっていくとなかなか退勤時間の定時には帰れないと思うんです。働き方改革と言われていますが、その辺のところをどういうふうに変えていくか。そこで、うまく言えないんですけど、皆さんとここで話をしながら、仕分けの仕方を学びたいなと思っています。よろしく願います。

【委員長】

ありがとうございます。

学校の立場からそれぞれ具体的な忙しさの中身でご提案をいただいたところですけど、わかる部分もあるし、まだ改善点もあるような気もいたしますので、我々の検討委員会の中でこういうことを課題にして、こういうことの方角性を導き出せばいいんじゃないかというヒントがすごくあるような気がするんですね。そういう意味では、最初に委員がおっしゃっていただいたように、何が忙しいのかという原理をきちんと押さえておく。そのところは最大公約数的なことというのは何かあるんじゃないかなという気はします。そこら辺でいろいろまた意見があったら教えていただけたらと思いますけど、今の皆さんの意見や学校側の意見をお聞きになって、何かお気づきの点とか、こんな方向性ということがあれば、教えていただけますでしょうか。

【副委員長】

よろしくお願いいたします。

まず、先生方から本当に忌憚のないご意見いただき、ありがとうございます。

私自身は、まず何が本当に忙しいのかわかっていないぐらいに忙しいというところに本質的な問題があると思っております。同時に、様々な調査であるとか統計的にはあらわれている部分もあります。学校の先生は、この10年間で平均して30分ぐらい仕事の時間が延びています。週当たりの平均は、小中で大分違うというのはあるのですが、もちろん小が一番大変、授業の切りかえとかも難しいのもあり、たしか1日11時間半を超えていて、12時間近いわけです。普通に考えると、先ほど言われたように朝7時ぐらいにもういらっしゃる先生であっても、12時間、夜7時まで働くわけです。それが日々、5日間ですよ。かつ、当然ながら、学校の先生方というのは校務による拘束とかも多いので、自分の裁量で動けるところというのがなかなかないと。どう考えても、完全にぱっつんぱっつんになっているという状況があります。

そうしますと、これはまず質の話を考える以前の問題として、量を何らかの形で減らしていくことを我々は考えなければならない。だけど、同時に、このテーマの中であったように、先生方というのは、今、一人一人の子どもを見ていきましょう、あるいは、これは子どもが多様化したというよりは、子どもの多様性を改めて考え直すきっかけを発見したというふうに考えていますが、例えば子どもの学習障害とか発達障害があるという、様々な学習が、これまでは教室の中で全員同じように扱ってくればよかったものから、個別の児童・生徒の状況に合わせることをちゃんと考えていきましょうという、よくよく考えたら当たり前なんです、実は子どもの多様性があるんだということをもとときちんと捉えて考えていかなければいけない。そうすると、個別に先生方というのはそれぞれの対応というのを考えなければなりません。これは量の面でも質の面でも恐らく大変になるわけです。

また、授業の中でも、子どもたちが自主的に発言をしたり議論するというのが最近増えてきています。今、プレゼンテーションをすることも増えているわけですよ。私はこのような取り組みはとてもいいことだと思っていますが、そうしますと今度は、個別指導が必要になり、テーマを考え、色々なことを考えていかなければなりません。これは大変になるわけです。そうしますと、今お話しした話は、学校で本分としてやらなければいけない教育の話です。それでは、逆に本分以外のところ、恐らくここで、例えばイベントであるとか課外活動、部活動ですね。あと、これまで、ある種、日本的な意味で人海戦術のように対応してきた、例えば欠席の連絡とかもありましたが、これまで欠席を全部電話で受けるとかですね。電話ですと、先生が電話に張りつかなければならないわけです。そういった部分の省力化、IT化といったことは考えていかなければいけないだろう。特に日本の学校の特徴は、非常

にイベントが多い。それから、あと部活動ですね。正直言いまして、先ほど先生からも部活動をやりたい先生もいるんだというコメントがありました。その気持ちはよくわかるんですが、それは学校の先生の本分ですかということをやはり考えなければいけないと思います。例えば、私、今、偶然イギリスにいますけど、イギリスなんかでも部活動はありますが、その部活動はほとんどボランティアの人がやっています。学校の先生の本分ではないわけです。もちろん、やりたければ、その学校の先生がボランティアでやることは構わないと思います。だけど、そこに一番の中心が置かれて、教育の部分が、特に教育準備がとても大変になっていく。個別の1人1人の生徒、児童を見るためには、そこに時間を割かなければいけない。その部分が押しやられるのであれば、これはやはり本末転倒と言わざるを得ない。その意味でも、これまで築いてきた学校文化をある程度見直しながら、必要なきめ細かい教育というのを学校の先生が行い、また、特に今、学校の先生の悩みというのは、授業準備ができないというのがアンケートを取っても一番大きいわけですね。要は、本分である授業準備ができないというのは致命的な状況ですので、授業準備等をしっかりと行えるようなものが必要だと思っています。

もちろん、それを可能にするときに一番よいのが学校の先生の人数を増やすことなのですが、なかなかすぐには東京都も国等もうんと言わない状況の中では、減らせるものを減らすしかありません。だけど、減らせるものというのは、単に減らすだけじゃなく、可能であれば地域等に移行して、そここのところにより充実した形でやっていただけるような、そういった体制づくりが必要なのかなと思っています。

【委員長】

具体的なことをおっしゃっていただいて、改善策をおっしゃっていただき、ありがとうございました。やっぱり本分とそれ以外を分けることであるとか、そういった指摘をいただきました。

【委員】

私からは3点ほどあるんですけども、この間、境南小学校で研究発表会が教育フォーラムを兼ねて行われたわけですけども、中学校もそういった機会というのはあるのでしょうか。要は、市民科的な、社会に教育課程を開いてやりましょう的なものの研究発表とか取組というのはあるんですか。

【指導課長】

それは事務局のほうで答えさせていただきます。

武蔵野市民科の取組は、小学校の各校行っていただいておりますけれども、前回のような境南小の発表については、今回も教育委員会の教育課題研究開発校としての発表をお願いしました。現在、第二中学校が1年目として研究を行っていただいておりますので、第二中学校は来年発表を行っていただく予定になっております。

【委員】

ありがとうございます。といいますのは、恐らくこの検討会でも次年度、何か実践研究的なことをするのかなというイメージがあるんですが、というか、私の意見としては、何か実践しながら実態を評価していくという取組があるといいなと思っていたものですから、お尋ねしました。

印象としては、地域と学校が連携してというところだと、小学校は授業研究とひもづけてやるのが中学校と比べて比較的容易なのかなというところを感じつつ、中学校になると、やはり部活動の問題というのはすごく大きいなと思っていたんですね。委員のお話からそういうふう感じたわけなんですけれども、そのあたりを少しモデル的に取り組んでみて、いつもだと、多分、学校のこういった研究授業協議会関係というのは、子どもがどうなったかというところに評価の重きが置かれていると思うんですけれども、同時に、その取組で教員はどうだったかというところもしっかりと評価できるといいのかなと思うんです。要は教員がどうだったかという視点です。それが1つ目です。

というのが、それが2つ目と重なるんですけれども、多分、部活動にしても、教員を対象としたとある調査で、部活動を地域指導者に移行してもいいかという調査があったようですが、断固反対という教員が7割ぐらいいたそうです。今、部活動は教員の献身的な取組によって支えられているというところから、ある意味、聖職だと言われ続けてきた先生方の働きがい、やりがいというところも、ワークエンゲージメントの確保のためには重要。でも、そこも大事にしながら、何が忙しさの構造になっているのかという構造化の作業はやっぱり必要だろうなと思うんです。その構造はある程度できているんですか。

どういうことに忙しいかの一覧はできている感じなんですか。

【委員】

私というわけではないんですけれども、指導課の中で何が忙しいかということも多分アンケートというのは取っていたのかなというふうに思います。

これは全国の例ですけども、私も何が忙しくて、何を改善しようとしているのかなというところを調べたことがあったんですけども、働き方改革の事例集というのを国が今年の3

月に出していたんですね。その中で、これをやれば何時間削減できるとか、そういったことは出ていましたね。そういったことは見たことがありますけども。

【委員】

分かりました。ありがとうございます。武蔵野市でも教員を対象としたそういったデータがもしあるのであれば、そのあたりの分析を少し丁寧にやっていくといいのかなと思ったんです。まず構造ができ上がってくると、もしかしたら、いろんな構造の要素同士が関連しているかもしれないし、別の、例えば3つ目の提案なんですけど、例えば発達障害の子どもがいる、不登校の子どもがいる、そこに対して、すごく忙しさが関連しているというような何かモデル的なものが、統計的に解析しようと思ったらできるので、そういった要素があるのであれば、恐らくそこに取組を手厚くやれば、教員の負担が減るよね、そこに地域が介入できるといいよねというようなモデルを提案できることにつながるのかなと思ったんです。なので、私が言いたいのは、子どもたちへの支援、特別支援もすごく充実していると思うんですけど、一番支援が必要なのは、そういった子どもがいるときも、先生に対する支援という視点でいろんな事業を見直していけるといいのかなと思いました。

【委員長】

私も幾つか言わせていただきますけど、今の話を聞きながら、皆さんのほうから地域の方々たちからまた改めて質問とか、こういう点はどうだというふうに確かめる点があったら、ぜひおっしゃっていただきたいと思います。

私は、大きく2つなんです。1つは、先ほど話があったように、子どものために大切にしなければいけない機能というのを校長先生や副校長先生方もおっしゃいましたけれども、学校の仕事というのは、授業なわけですね。授業というのは、1つの大きなキーワードになりますので、授業時数をどうするかという、授業のやり方もそうですけど、授業そのものをどうするか。別の調査ですけれども、諸外国と比べると、日本の先生たちは、学習指導要領で授業数が決まっていますけれども、中学校の先生の場合ですけれども、意外と日本の先生は少ないんですね。外国のほうが多く授業を持っている。ただ、そこで大きな違いは、部活がなかったりとか事務的な仕事がないというところがあるようなんですけど、そうすると、ほかの国との比較のことから考えると、そういう減らし方というのは1つあるのかなという気はしますね。

ただ、もう一つは、2つ目に言いたいのは、何かというと、教育の仕事というのは、忙しいということのとらえ方ですね。考え方ということになると思うんですけども、忙しいと

というのは、教師にとって専門的なことをやっていたら、授業をやったり教材研究をしたり、子どもと関わっての分析をしたりという、あるいはちょっと物にまとめたりとかいう、すごく楽しいわけですね。それは先生たちに保障してやるということだろうと思うんです。授業、子どもとの関わりの中で、自分は学びの楽しさを体験すると。私はずっと教育の仕事をしてきていますが、そういうことはちっとも嫌にならないわけですね。ですから、そういう部分というのを大事にする教育を取り戻すというか、それは本分だということですね。それを改めて先生たちが自覚というと言い過ぎですよ。じゃ、自覚していないかという、そうでもないんですけども、先生方が授業を楽しむという発想がないと、すごく難しいし、もちろん気持ちの面でも楽しんだり専門性を生かすには、授業そのものが自分のものにならないといけないですよ。子どもと一緒に学ぶことを楽しむ先生というのをどんなふうにして考えていったらいいかというあたりがすごく重要な視点だろうなというふうに思います。そういう意味で、教師の専門性を生かすことの大切さということですね。

ちょっと補足的にデータの的なことを言いますと、実は学習指導要領というのは昭和33年ぐらいからずっと10年ごとに改訂されてきて、令和元年の改訂のところで8回目になるんですけども、昭和五十二、三年ぐらいに小中学校に通われた方もいらっしゃると思うんですね。あのころの学習指導要領の総則というのがあるんですけど、総則の文字数を調べてみると、原稿用紙4枚なんですね。1,600字ぐらいです。今の令和元年の学習指導要領というのは1万字です。1万字ですから400字で計算すると25枚ぐらいですかね。そういうふうに約6倍ぐらいに増えているんですね。そして、今の先生たちがやっている小中学校の学習指導要領というのは、10年前の改訂のときと比べて2倍になっています。今おっしゃるように、実感としてやるのがすごく多い。これは文部科学省に文句を言いたいところですけども、何かやるというと、学校経由でどんどん持ってくる場所がありますね。ところが、いろんなところで事業をやるときに、当然、仕事が増えると、そこに人と金をつけるというのが1つの仕事のやり方なわけです。そういう意味で、委員もおっしゃった業務分析というのは、学校教育の場合においては、人とお金の関係の分析がないわけですね。そこに原資がないというところがある。財務省なんか文部科学省の予算書なんかをぱらぱらと見ると、出してもほとんど削られるわけですね。そういう動きというのが少子化の中で子どもの数が少なくなっているから教育予算は少なくなっているんじゃないかというのは、どうも財務省の考え方の中にあるような気がする。ちょっとそれは言い過ぎかもしれませんが、それをいろんな力で解決してほしいと思うんですけども、先ほども話がありましたように、学

級の定数を増やすとか。そういうことがなかなか進まない。これはしょっちゅう言われていることなんですけれども、そういうところがあって、40人学級から35人学級になるけど、あれも年次進行なわけですね。今、小学校一、二年生だけでやっているのかな。そうですね。ずっと中学校までいくには相当時間がかかる。全員が一遍にぱっとやれる力はないような気もするんですけど、これは言い出し始めると、僕は余計なことを言いそうなので、その辺にしておきますけれども、大きく2つ、子どもたちの本分として、先生たちは授業をうんと大事にする。そのために我々もこういう検討委員会で何ができるかということと、もう一つは、忙しさ、教師の専門性としては、ある意味では、楽しむという言い方はおかしいけど、忙しいところに喜びが見出せるという部分があるので、それを検討していけたらいいなというふうに僕は思っているところです。

しゃべり過ぎて申しわけなかったんですけども、皆さんから1の視点のところ、今までまだご意見をおっしゃっていない方、どうぞ遠慮なくおっしゃっていただければありがたいんですが、いかがですか。

【委員】

先ほど構造的な取組というところで、私、話し終わってから、そういえばということがあったんですけども、武蔵野市の場合、先生いきいきプロジェクトという形で、6年ぐらい前からですかね、それこそ先生たちの勤務時間では何が大変かとかそういったことのアンケートとかもとって、それを分析されて、そういった取組として、例えばタイムカードの導入であるとか、市講師の配置であるとか、また、地域人材の活用というところで地域コーディネーターにお手伝いいただいたりとか、いろんなことをやっていたらというふうに私は感じています。本当にその取組一つ一つがとても助かっているなど、今、副校長の立場で感じているところです。

先ほどの業務分析というところでいくと、タイムレコーダーで毎月の勤務時間が出てくるんですけども、残念なことに副校長が一番長いんですけども。その次に、例えば若手の教員でどうしても勤務時間が長くなりがちな教員がいるんですけども、今月このぐらい働いていたよと去年も何回か話したことがあったんですね。その教員が今年どうなっていたかという、同じ11月なんですけども、半分までいかないまでも、3分の1ぐらい削れていたんですね。その先生に、今月、「実はさ」という話をしたら、「また勤務時間、かなり減っていましたか」と気にしていたのですが、昨年より減っていたことを伝えると、「いやあ、よかったです。大分意識して減らすようにとか調整するようにしていたんです」という話を

してくれました。

そういったところで1つ1つの取組というのを武蔵野市ではやっていると思うので、私じゃなくて、どなたかにお話ししていただいたほうがいいんじゃないかなと思うんですけども。

【委員長】

今、補足の話がありましたけど、何かございますか。

【委員】

今、おっしゃられたように、教育委員会として、学校の先生が子どもに向き合っていたく本分のところで、授業時間数を減らすことができるよう市講師の配置などを行っていきます。学校の教員は都が配置しますので、そこは一定、都に任せるしかないのですが、市の予算で配置できるスタッフというのをなるべくつけるようにしたいということと、あと、このテーマにもあります子どものために大切にしていきたい機能ということで、学校の中には福祉的な機能といいますか、不登校ですとか虐待ですとか、そういったところをどうしてもこれから役割として求められると思います。そちらに対しての専門的なスタッフというんですかね、スクール・ソーシャルワーカーですとか家庭と子どもの支援員ですとか、そういったところで市で予算をつけて人数的に充てられるところというのは、毎年、市長部局への予算要求を行っており、これがすべて認められているわけではありませんが、我々としてはなるべく予算化してもらえよう努力しているところです。ただ、予算化されればそれで多忙化が解消されるかといえば、そういうことではありませんので、それでこういった新しい体制についての検討をいただいている、そういう状況があると思います。

【委員長】

今、補足の説明をしていただきました。

1の視点のところ、主に学校側から意見が出てきましたので、皆さんからこの点をどうだとか確かめたかったり新しい意見があったら、どうぞお願いいたします。

【委員】

今、テーマ1のところを話して、一番初めに私、ほかのところはという話をしたと思うんですけど、テーマ2のところの検討に対する方向性の意見というのを見ると、例えば教師の多忙化という視点というのが結構この部分であるんですね。要は、今、これは事務局で分けていただいていますけど、教師の多忙化ということをとっても、2つ目のテーマのところにも教師の多忙化という意見があって、例えば一番上の教員の負担軽減、システムをサポート

するとか、これが1つの解決の方向性だろうと思います。ほかのところでも論点で話された部分についても、上の1と重なる部分であったり、そういうのを列挙していくと、今まで話された論点が1の中に入ってくるのが結構あるんじゃないかなと思っていて、多忙化ということをとっても、今までの論点を整理すると、今までも話されているところが反映されている部分があるのではないかなと思っています。2つのところに共通するものが入っても私はいいと思いますし、それぞれの解決する視点が違うだけで、対策としては同じなので、そのあたりはもう一回整理して議論してもいいかなというふうに思いました。

あとは、先生からの意見を聞いて、分けたり、はがしたり、減らすというのは、多分先生の中ではないんだろうなと思います。なので、基本的にはシステムとか、今、教育部長が言ったような別な支援、支援策というか、教員を何かでサポートするような形が考えられないか。例えば部活動もそうですけど、それぞれの学校の実情に合った支援をどのようにしていくのか、あとは、支援する担い手が教員なのか、地域の人材なのか、企業の人材なのか、そういうところを切り分けて、市内でもいろいろ企業がありますし、支援していただけるところもあるでしょうから、そういうところを結びつけていくという考え方を持っていくのが大事なかなと思いました。

【委員長】

非常に分かりやすく今、説明いただきました。つまり私が今、委員の話をついたところは、テーマ1のところ、大切にしていきたい理念というか、考え方みたいなことをここでまとめてみるといいかなという気はしますね。今、皆さんから出た意見は非常に大事な、貴重な、忙しさに対する原理みたいなことが出てきているので、それをここで押さえて、テーマ2のところでは、学びを体験させたりする具体策は何なのかというあたりを今、委員のご指摘を受けながら考えると、多忙さ解消のための対策として、例えば方向性、意見のところを書いてありますけれども、負担軽減のシステムをサポートしていくのを考えたらいんじゃないか、そこに先ほど指摘のあった業務分析の考え方というのが使えるような気がするんですね。それをどういうふうにするか、いろいろなところに分散させて、手伝ってもらったり、あるいは援助を求めるか。それから、教科担任の先生も地域と接点を持つことも大事だということ、これは地域の人たちにサポートいただけるような人材確保とか、接点を持つことによって開けてきますよね。そうすると、教材もあるいは授業構造も変わってくる。それから、一方通行はだめで、逆のベクトルも増やしていくこと、これもそうですね。コーディネートすること、人も物もそうだと思うんですけど、そういうふうを考えていくと、このところで具

体的な方策みたいな、実情と合わせたものを幾つか挙げていくと、そこを例えば学校が選ぶとか、そういうふうにしていくと、1と2が連動してくるなというふうに大体私なりに今、理解していたところだったんですけれども。そんなものでよろしいでしょうかね。齟齬があったら申しわけないです。

ちょっとしゃべりが多くなっていますので、皆さん、どうぞ、おっしゃっていただいて、こういう点、こんなふうに考えたらいいんじゃないかという。

【委員】

ただいま委員長のほうからお話いただいたことそのものなんですけど、私も地域コーディネーターをやっています、最初にも申し上げたかな。先生方は減らすものがない。じゃ、何するの。例えばこんなことができないかと投げかけられると話が前へ進むのかなというふうに思うんですけど、そういう面では、地域とか保護者に先生のほうから見てこんなことをしてほしいとか、できるといいなというようなことはございませんか。中学校の部活の話はそのとおりだと思いますし、あれは教育委員会のほうで考えていただけるのかな。実際の減らすものがないと言われちゃうと、前に進まない。だから、こんなことがというのを例を挙げていただけると非常にありがたいなというふうに思いました。

【委員長】

どうですか、今のようなご意見は。先ほど副委員長がおっしゃっていましたが、日本は学校行事が多いとかイベント的なものが多いという話がありましたけど、それも1つの論点になるかなというふうに思うんですね。何かそういう点で皆さんのほうで、今の委員のご指摘にお答えみたいなことがあれば、どうでしょうか。

【委員】

イベントというと、具体的にはどんなものをイベントといえよよろしいんですか。例えば、小学校でいえば運動会とか音楽会とか作品展示会とか、あとはセカンドスクール、そういうことを言われているんですか。それが負担になっているという。イベントというもののとらえ方がちょっとわからなかったもので。

【委員長】

私がイベントという言い方で言いましたので、今の件で何かございますか。

【副委員長】

いわゆる一般的な学校行事ですね。学校行事と言われるものが、これは日本の特徴ですが、非常に多いです。例えば、我々が当たり前のように考える修学旅行というのは、海外ではほ

とんどありません。正確に言うと、任意参加のイベントとしてあるという形です。あるいは文化祭であるとかそういったものもほとんどありません。非常に淡々と学校を行っていくというのが一般的な状況です。ところが、日本の場合ですと、例えば入学式にしても、卒業式にしても、事前準備みたいなものから始まり、卒業式なんかは特にそうなんです、ある種、儀式的、形式的な部分も非常に力を入れるがゆえに、かなり前から準備をしますし、また、そのために、特に先生方は本当に入念な準備をされていらっしゃる。ただ、それは、確かに日本のある種の学校文化を築いてきたものではあるのですが、我々が教育とかをおろそかにしてまで本当に維持し続けなければいけないものなのかというところは実は考えてもいいところです。

ただ、武蔵野市の場合ですと、課外に関しては、例えば、夏休みにも体験教室等、ジャンボリーとかそういった形でやるとか、武蔵野市独自の取組は非常に多様にやっており、それは私は非常によいことだなと思っているんですが、実はそれも1つなわけです。武蔵野市は地域の中でジャンボリーみたいなものやっつけていこう、これは学校を横断し、地域の中でやっつけていくという形で、行事をもともと市の中で作り上げてきたし、独自に学校からある種、離してやったわけですね。同じようなことが実はたくさんできるはずかもしれないと私は考えています。これはどちらかというと、要は、今、学校の先生は本当に忙しくなっていて、かつやらなければいけないことが増えて、じゃ、何かを減らさなきゃいけないときに、実は日本の様々な学校の行事というものも、場合によっては、減らなくてもいいですが、そうしたら、担い手を教員から教員じゃない者に置きかえていくとか、そういったことは可能かもしれません。あるいは場合によっては行事そのものを減らすということも私はあってもいいと思っています。ただ、学校行事を守るということであれば、その担い手を教員ではない存在がどのように担保していくのかということは考えなければいけないと思っています。

1点注意してほしいのは、地域に移行するといっても、そうすると、今度は地域のやらされ仕事になると、質が悪化するわけです。なので、ルーティーンとして地域に任せなければいけないものは、ちゃんとシステムとして保障していかなければ、実際には地域への移行というのは私は難しいと思っていますので、単に地域に丸投げしたらやってくれるというほど、ありがたいものではありません。ほかの方々、皆さん忙しくなっているという現状もありますので、ルーティーンとして地域に移行するなら、それなりの制度的なあるいは金銭的な保障をつけていく必要があるし、とはいえ、何か地域の中でサポートできる人がいたら、そこはできるだけその方々に担っていただいて、教員が非常に大きい負担を果たすような

形で行うような学校行事等は場合によっては見直していくというのはあるというふうを考えて、そのような意図でお話いたしました。

【委員長】

ありがとうございます。

いかがでしょう、皆さん。そうですね。なかなか減らすものがないということだとあれですけど。

【委員】

武蔵野市の先生いきいきプロジェクトの報告書を見つけました。多忙感というのは、要はこの報告書でいうところの、ワークライフバランスをちゃんと保てていないことというふうに私なりに解釈したんですけども、思い出しました。私、公衆衛生のいろんな研究を見ていて、ポジティブディビアンズ、片隅の成功者という概念が最近、公衆衛生の領域ではやっているんです。どういうことかということ、この国に住んでいたら、絶対栄養状態が悪くなるよねという途上国があると思うんですけど、その中でもすごい栄養バランスのとれた健康状態のいい人が、ほんの数%、絶対いるんです。その人が一体何をしているのかに着目して介入していこうというアプローチなんですけれども、私たちは、問題があるマジョリティに視点を置いて、何が要因なんだ、何を除去しないといけないのかばかり考えるじゃないですか。でも、教員の中にも、別にそんなに忙しくなくてと言ったら失礼ですけど、うまくワークライフバランスを保っている人も中にはいらっしゃる。その典型は、もしかしたら育児中の若い先生かなと、娘の学校の先生を見ていて思いました。子どもが熱を出したとあって、うちの娘もそういう先生が担任になったことがあるんですが、何か許されますよね。先生が突然、5時間目の直前に呼び出しを食らって帰っちゃったみたい。でも、保護者もそれを分かっている、理解があつてという状況があつて、多分、学校の中ではすごくばたばたと大変なんだろうけれども、何でその先生は休暇をとらずやれているのか。育休じゃなくて、育てながらやれているのかというあたりも少し洗い出しをしてみてもいいのかなと思いました。そこでもし校内で大変な状況が発生しているのであれば、保護者なり地域ができることがあるのだったら、できるといいのかなとふと思いました。

【委員長】

具体的ないい事例をご紹介いただきまして、ありがとうございます。

それでは、今までの議論を聞いて、せっかくですから、もしよろしかったら、今まで発言のない方に順にお願いしてもよろしいですかね。

【委員】

単なるうわさなんですけど、もう17年、18年前に、うちの娘が小学校何年生だったでしょうか。そのころの担任の先生のお話だと、武蔵野市の先生たちは、セカンドスクール、長いんですけど、宿泊行事が多いので負担が大きい。それで武蔵野市の教員になるのはちょっとハードルが高いというのをその当時聞いたことがあるんですけど、それは三鷹市とか杉並とか世田谷とか近隣の学校事業と比べると、多忙化という点では武蔵野市の先生方はやっぱり大変なんですか。どうなんですか。

【委員長】

なるほど。それについて、どなたか何か助言いただける方はいらっしゃいますか。指導課長、何かお答えないですか。

【指導課長】

宿泊行事につきましてですけれども、小学校4年生からプレセカンドスクール、小学校5年生でセカンドスクール、6年、日光移動教室、中学校1年、セカンドスクール、そして中学校3年生、修学旅行ということで、宿泊行事としては、他区市を見ても、4年生からというのは特に多くはないかなと思っています。一番大きいのは、セカンドスクールが泊数が多いところなんです。ただ、セカンドスクール、泊数が多いということは、長期宿泊のねらいというもの、武蔵野市として大事なものとして思っていますし、そこを補完していくために各宿全てに指導員をつけておりますので、探すという部分でいえば、管理職の先生方は大変な部分はあるんですけども、基本的には担任が4時で子どもたちを放してしまいますので、あとは全部指導員が小学校5年生を見るということですので、担任の先生方は、あとは夜の健康観察とかで回るのも、別に回らなくてもというようなところも、自分も管理職のときに経験はさせていただきました。看護師が回るということがありますので。

そういうところがあるので、そういう部分での負担軽減というのはかなり行った部分での宿泊です。ただ、泊数が長いので、それだけ拘束されるという部分は大変かもしれませんが、その分についても交代できるようにというのは、学校のそれぞれの工夫の中で行っていくべきですが、やはり担任の先生がついていくというところが一番大きいところがあると認識しております。

【委員長】

これは小学校は5年生で、中学校は1年生でしたかしら。

【委員】

4年生、5年生、中学校1年です。

【委員長】

なるほど。今のような状況、これを言ったら怒られてしまいますけど、子どもの宿泊体験とかそういうのは、昔、昭和50年代、国のほうもグリーンスクールという言い方をして、出始めたことがあるんだと思うんですね。そのころにこちらの市長さんでいらした方が土屋市長さんだったですか。肝入りかなんかでそういうのを立ち上げたんだと思います。すごく注目を集めた、もう30年ぐらい前の話だと思います。そういうので発足しているんだと思いますが、僕は教育的というか、子どもの成長にはすごくいい体験だと思うんですね。ですから、これが教育課程上負担になっているので、思い切って教育課程からぽんと外しちゃうという手も1つあるわけですね、検討課題として。そして、5年生が例えば10泊行ったら、その間、10泊は先生たちは自分で教材研究の勉強、サバティカルだとかいうぐらいにしてあげるとすごくいい気がする。あなたの言っていることは現状から考えられないよというふうにおっしゃるかもしれませんが、それぐらいドラスティックにやらないと、ある意味では、今のような問題というのはなかなか難しく、子どもの体験を、例えば10泊で5年生をどこかに連れていった、そこは全然別な観点の人が教育をするという形で、学校の教育活動から外してしまうというふうにしてあげると、すごくいい感じがするんですけど、それについては、今、細かい議論はなかなかできにくいので、将来、理想的にはそういうことを考えた発想というのも必要じゃないかという気がするんですけど。ちょっと私、余計なことを言いましたけど、今、学校で工夫するとか、例えば誰が5年生の担任をするとか、そういうのになると、やっぱり校長先生方もいろいろ苦勞される、校内人事のあり方として。そういう現実が実際にあるんじゃないかという気がしますね。

そういう意味では、ハードルが高いという話がありましたけれども、僕は子どもの体験としてはすごくいい経験だと思うんですね。これは全国にも類を見ない経験ですので、実は今、私、大学で教職課程の科目もやっているんですけども、学生たちに聞いて、小中学校の経験で一番何がいいかという、宿泊体験なんですね。これは非常に語ります、学生たちは。それが非常におもしろくて、時々200人ぐらいの大きい教室に学生たちがいるときに聞いていくんですね。1泊2日の経験者、2泊3日の経験者とずっと聞いていくと、大体長いところで3泊4日ぐらいでみんな手がおりるんです。ところが、それを増やしていくと、7泊、8泊ぐらいで二、三人手を挙げる子がいるんですよ。手を挙げた子に、君は武蔵野市の小学校だったのかと聞くと、「そうです、何で先生、知っているんですか」という、これはセカ

ンドスクールという有名な施策なんだよという話をして、体験活動の意義を僕は話をするんですけども、これは教育的な意義がすごく高いと思うんですね。そういう意味では、指導課長もおっしゃいましたけれども、教育の質というか、教育委員会は非常に大事にしているというのは、理念として大事にしたいと。それでもやり方が、年数が20年、30年たってきた、現代的な社会の仕組みに合わなくなっている部分もあるんじゃないかと。そこらあたりを何か新しい知恵が出ないのかということで、先生方の意欲と子どもの成長のために何か新しい発想を考えたいなというふうに思って申し上げました。

じゃ、ほかに何かございますでしょうか。

【委員】

私から、先ほど委員長が武蔵野市の理念とか学校としてのビジョンとか、それに基づいて取捨選択するのがいいんじゃないか、まさにそのとおりかなと思いました。そこに合っていないものに関しては、イベントが多いとかという話もあったので、漫然と行われるようなイベントもあると思うんです。そこについては、武蔵野市の理念、学校のビジョンに合わないものはやらないという選択をどんどんやっていけばいいかなと思っていて、直近で、小学校の周年行事があったんですけど、あれが果たして武蔵野市の理念、ビジョンに必要なのかと考えたときに、大概要らないんじゃないかなと私は思っていて、そういったものをどんどんやめていったらいいんじゃないかなというふうには思いました。

【委員長】

ありがとうございます。非常に具体的な例をおっしゃっていただきました。

【委員】

ちょっと理想論かもしれないんですけども、生徒たちを管理している時間というか、見張っている時間というか、そういうことももしかしたら長いのもかもしれないと思っていて、もう少し決まりなど減らしてみても、子どもが自立して自分で動けるような仕組みをつくると、子どもも役割を持つことができるとか、自分から学んでいくことができるとか、そういうことにつながるかなと思いました。決まりの少ない学校というのは、どういう子どもが育つのかなというのには、いろいろとドキュメンタリーなどを見ていて興味がありますので、そういうこともどうでしょうかと思いました。

【委員長】

どうですか。PTAのお立場でご覧になっていて、学校は決まりが多過ぎる感じがされるということでしょうか。

【委員】

さっき副委員長さんのおっしゃられていた、行事のための準備、礼をする練習をすごく長くやるとかそういうのは教育とかとあまり関係ないところの人間からして、ちょっとどうなのかなとは思いますが。

【委員長】

ありがとうございます。分かりやすい話でした。

【委員】

先ほどジャンボリーの話がちょっと出ていたんですけども、ジャンボリーについては、三、四年前ですか、先生たちの働き方を見直さないといけないという話が出まして、教員の方がジャンボリーに同行するのは仕事のにも大変なので、もう行きませんみたいな、そういうご意見があって、決まったときに、逆に地域はえーっとか思ったんですね。それまでそういう話があって、今みたいなお話を聞いていけば、素直に受け入れることができたんですけども、今までずっとやってきたものが、どうしても古い人間なので、そのまま続くと思っていたので、急に変更されてしまうと、えー、人手をどうしましょうという感じになったので、すごくばたばた慌ててもめた経験があります。

あと、それから、夏休みの小学校のプールの開放の日数についても、かなり昔よりは減ってきているのかなと思います。そちらのほうでも多分いろんな事情があって、そうなったんだろうなと思うんですけども。

それと、あともう一つ、逆に、学校の周りに住んでいる地域の者としては、どうしてもその学校がみんな好きなんです。なので、その学校の応援がしたいとか、何か協力したいという気持ちがすごく強い人たちが、割とおじさん、おばさんは多いと思うので、そこをうまく活用していただきたいということと、あと、四、五年前だと思うんですけども、お抹茶の体験を、子どもたちにお抹茶を飲ませてあげたいと先生のほうからお話いただきまして、別にお家元とかそんなすばらしい人は誰もいなかったんですけども、こういうことをやるんだけど、手伝ってくれるとって声をかけましたら、結構いろんな方が集まってくれて、お道具についても、皆さんがいろいろ持ち寄ってくれたり、どこからか借りたりとか手当ができて、5年生に体験させて、みんなで一緒に飲みましょうということを2年ぐらい続けてやったんですけども、子どもたちは多分新鮮だったと思うんですけど、お手伝いしてもらった、昔、お母さんだった人たちが思いのほか喜んでくれて、今度はいつやるの、今度はいつやるのと結構楽しみにしているの、やっぱりそういう方をどん

どん活用していただけたら。その進め方についても、担任の先生と、このくらい時間を置いてという時間の配分についても、私たちの意見も取り入れていただけたので、すごく私たちとしては新鮮で楽しかったので、逆に保護者の方のほうが、私たちもやりたかったというような声があったので、こちらからは何もお手伝いできないんですけれども、こういうお手伝いというふうにおろしていただければ、幾らでも働きたいなと思っている人がいっぱいいると思うので、どうぞ活用してください。

【委員長】

非常に具体的ないいお話をいただきまして、ありがとうございます。今みたいなことができると、自然に、何でもないようだけど、システム化していきますよね。すごくいいことだと思います。

【委員】

私も1番のテーマの、学校の先生方には1人1人の子どもたちをよく見てもらいたいという、これに尽きると思うんですね。事務的なことはどんどん減らしていただいて、子どもたちを見る時間や授業が大事というのは当然ですけれども、いろいろな行事に関しては、行事の内容にもよりますけれども、行事を通して先生と触れ合う、これも大事なことではないかなと思います。ですから、全面的に減らしていくというのは、私も古い人間なので、ちょっとその姿が見えないですけれども、子どもと先生との触れ合いを大事にしていきたいなと思っています。

【委員長】

そうですね。なるほど。やっぱり教育の基本にそれがないと、いろんなことをやっても崩れてきますよね。非常に貴重な意見、ありがとうございます。

【委員】

先生方から多忙な理由を聞かせていただいて、ありがとうございます。

今回のタイトルが学校と家庭と地域の協働というところで、忙しさが〇〇教育だったりとか、子どもの多様性に対応するとか、それが一番主になっていると分かったんですけど、これから協働しようと思っている家庭とか地域に対して、ちょっとこれは忙し過ぎるよという、そのようなことはないのか、ちょっと不安があって、例えばPTAがうるさいとか、もう死語かもしれないですけど、モンスターペアレンツみたいな対応が大変とか、そういうのがあったりとか、地域のほうもコミセンなんかの会議に出なきゃいけないとか、これから我々協働を考えようとしている家庭や地域に対して、忙しいという原因がないのかなとい

うところ、こういう場なので、そのところがなかなか言えないのかもしれないんですけど、もし差し支えなければ、ちょっとお聞かせいただきたいところがあります。

あと、忙しい中でも、ワークライフバランスを保ちながらやっている先生がいらっしゃると思うので、どんどん除去するだけじゃなくて、いいところを我々が見つけて、広げていけるといいなと思います。前回か前々回に話題となった子ども像のスローガンも、我々が選択して、その目標に向かっていこうという前向きな方向性がいいなと今日思いました。

【委員長】

ありがとうございました。今の点で何か補足していただける点がございませうか。

よろしいですかね。ありがとうございます。

【委員】

あのスローガンをつくりましようは、傍聴コメントでされたかなと思っていたので、大丈夫です。

【委員長】

貴重な意見、ありがとうございます。

【委員】

テーマ4になってしまうかもしれないんですけども、よろしいでしょうか。

【委員長】

どうぞ。

【委員】

先ほどからいろいろ聞かせていただいて悩んでいるのが、保護者や地域住民の方がどうやって子どもたちや学校に協力していくかというところで、ボランティア活動になると思いうので、ボランティア活動の内容が、安い労働力みたいなものとして活用するというものと、仕事としてちゃんとお金をもらってやるべきものという2つがあるのかなと思っています。

ボランティア活動はやっぱり楽しくないと続かないというのが大原則であるので、得意なものとかその方が楽しいなと思えるものだったり、やってみて成果があったとか、そういったものがボランティア活動は続くことにつながっていくので、ただ、なかなかボランティア活動するきっかけがないと思うので、仕方なく地域活動やPTA活動をやってみたけれども、やった結果、実はとても楽しかったという方も少なからずいらっしゃって、そういう方はやめた後も自発的に地域活動に残ってやっていくということもあります。

負担感というところでは、お子さんがたくさんいらっしゃって働いていて、とても忙しい

方でもボランティア活動をやっている方もいるので、負担感というのは本当に人によって感じ方がいろいろで、つまらないものは、どんなに時間が短くても負担感は大きくなりますし、楽しいものは長時間活動しても全然負担感がなかったりということがあるので、何かその楽しさみたいところをボランティアの方にお願ひできるような仕組みが必要で、誰も主体的にやる人がいないような内容のものは、もしかしたら仕事としてお金をお支払いして誰かに担ってもらものなのかなと思っていました。その仕事が学校の先生ではない別の方で、事務の方なのかなみたいところをちょっと思っていたんですけど、前回の傍聴の方のアンケートにも、事務の方も多忙化だというご意見があったりするので、お金をもらって働くような方々のいろいろなところもちょっと整理が必要なのかなと思いました。

今日配られた「地域と学校の協働通信」の中に学校支援協力者リストというのがあるかと思いますが、例えば単発で気軽に得意分野でこういうことができるよというのが、今、102名の方だと思いますが、ここが例えば修学旅行とか遠足とかもこういう企画が私はできるよですとか、学校だよりのレイアウトができるよとか、前回お話が出ていたピオトープの掃除みたいなものもできるよとか、ゲストティーチャーというような方の、たくさんの種類の方が登録してくださって、例えばこれが1,000人、2,000人と増えていったら、学校の先生方の負担感が軽減されるのかどうかみたいところは、ぜひご意見を聞かせていただきたい。協力者リストに載っている方は単発で気軽に得意分野でという、この3つを分かっている登録しているので、快くお引き受けいただけるのかなと思いました。

【委員長】

4のところに関連して具体的な話が出ましたけど、今、学校側に102名ぐらい登録があるんですけど、もうちょっと増やすようなことがいいんじゃないかという話がありましたけど、これに関して学校側の先生方、何かお考え、こんなふうなことをやっているよとか、こういうテーマは無理だよと、これならなるほどと思うようなことがあったら、どうぞ。

確かに学校の教育活動と連携の中でグループにして、このことはこのグループにお願いしようとか、この人にお願いしようとか、例えばボランティアで全く無償でやれる方と仕事としてやっていただかないと予算もかかるよというのがあれば、別な仕分けもできますよね。そうすると、システムづくりができていく気がします。

【委員】

学校支援協力者リスト、私も存在を知っていますし、昨年、幾つかばらばらとめくってお

願いしようかなということはあるんですけどね。ただ、今年、これを改めて見たときに、あまり使わなかったというところがあったりするんですよ。多分、100名、200名、たくさん数を入れていくということが1つ大事なことで、もう一つは、活用されるような体制づくりということも大事なかなというふうに思うんですけどね。今の委員に言っていただいたことで、これに使えるなということがまた頭の中にインプットされたということがありますので、こういうものがあるって、これに使えるんだよということ、それこそ、これをつくっている市の教育委員会の教育推進室のほうから、これはこれに使えますよということで定期的に発信してもらうという、そこは行政のほうにお願いしたいことなのかなというふうに思います。

例えば、学校のほうに新たにこんなことをやってください、あんなことをやってくださいとやってくださいに来るんだけど、じゃ、それはどうやったらいいのというところは学校に投げられているところがあるんですよ。そのときに、実は市の中にはこういったものもあるから、こういったところを活用してやってくださいというような形であれば、ああ、なるほど、じゃ、そのところとつながってやってみようかなというふうになれると思うんですよ。ちょっとした道しるべというか、そういうものがあるといいのかなというふうには、お話を聞きながらちょっと思いました。

【委員長】

今のつながりで、1つのアイデアとしてお話しいただきました。ありがとうございます。

話していくうちに、今、4のテーマのところに来ていて、僕は時間のことも気になるんですけども、4のところはすごく大事ですので、ここに移りたいわけですけども、今、様々、委員がいい問題提起をしてくださいましたので、こういうふうに主体的に参画できるきっかけづくり、それにはどんな方向性があるかということで、このところで最初に、大変恐縮なんですけど、副委員長、ここに関してご専門の知見をお持ちでございますので、特に課題となる方向性、リソースや保護者に対応されることにより負担が軽減されるとか、モチベーションの問題とか、こういう点について、副委員長のほうから、こんなふうに考えたらいんじゃないか、こういうふうな参画の仕方があるんじゃないかと、きっかけづくりのシステムづくりを超えた、この辺じゃないかというのがもしあれば先にいただいて、そして、皆さんでそれについて、こういうのが具体的にあるよとか、そういう話があれば伺いたいと思っております。先ほど皆さんから伺ってから副委員長にと思ったんですけど、逆にしますので、副委員長に先に提案をいただくとありがたいなというふうに思っていますけれど

も、いかがでしょうか。

【副委員長】

提案というほどのものはないのですが、先ほど委員の皆様から、特にボランティアとか参加というのは楽しくないといけないし、常に必要になってくるもの、つまりルーティーン的になってくるものは仕事としてやるべきだという議論には私はとても賛成です。

協力者リストのお話もありました。こういったリストが充実していくことはとても重要なんですけど、前回もお話ししたんですが、ただ、同時に学校の先生が活用するためには、学校の先生方に余裕がないと、新しいことでなかなかチャレンジできないので、このようリストをつくるだけではなくて、学校の先生方が負担を下げて、今の自分自身の教育に何が資するのかを考えていただきながらやっていくということが、どうしても必要になってくるのかなと思っています。

これは3（立場が異なる関係者のベクトルを合わせ、ゴール共有の仕組みや方法は）ともかかわるのですが、このように主体的に参画するときには、ある程度、学校、教員、それから地域の人、あるいは家庭といったものが同じような方向を向いていないといけません。皆さん、当然ながら、自分の中における、これをやるという思いがあり、しかし、それが別の方向を向いていると、ひたすらいろんなことをやっていけなくなってしまう。そのため、それをやるためにも、ある程度方向性を一緒にしつつ、同じ方向を向きつつやっていくということがとても大事です。そのときに、もしかしたら、地域コーディネーターの方であるとか学校運営協議会といったものが方向性を合わせる場として役に立つのかなと思います。方向性を一緒にしていくということを考えつつやっていかないと、皆さんそれぞれ年代によって学校の経験も違いますし、思いも違ったり、余裕も違ったりするので、それをすり合わせるような場をつくりつつやっていくということが重要なのかなというふうに私は思っています。

【委員長】

ありがとうございました。

具体的な方向性についてもお話があって、同じような方向性を向くということの大切さ、これはモチベーションにつながりますし、ある意味では、組織というか、連携の動きというのが進みやすくなる、滑らかになる気がするんですね。同じ方向性を向いて、何を自分たちは子どもたちの教育というか、生き方のために尽くしていくのかという視点が、方向性が一緒じゃないと意味がない。そのためにリソースの生かし方であるとか、私たち関係者のそれ

ぞれの人たちのモチベーションの持ち方とか、そういうのはすごく重要なんだろうというふうに思います。そういうふうにしていかないと、どうしても押しつけになってしまう、あるいはまた丸投げになってしまう、そういうところが非常に課題なんだと思うんですね。そういうことを整理していくと、下に書いてありますけど、仕組みづくりということが具体的に描けるんじゃないかというふうに思います。

皆さん、それぞれイメージができているとは思うんですけれども、それが我々の20人のメンバーの中でも、ある意味では1つの方向性に向かう必要があるような気がしますので、申し上げたところですけれども、特にこここのところで方向性、開放されることによって、どんな負担が軽減されるのかという具体的なことだとか、我々がそれぞれの専門性の部分であるモチベーションの持ち方であるとか、同じ方向性に向くことの大切さ、そういうことについて触れて議論させていただきましても、どうぞ、これに当たり、具体的にこんなふうにしたらいよいよとか、自分の場所ではこういうところが考えられるよということがあったら、アイデアとして教えていただけると、システムづくりの中に落とし込める気がしますので、ぜひ具体的な例を教えていただければありがたいというふうに思っておりますが、いかがでしょうか。

【委員】

先ほど委員がお話しされた学校支援協力者リストというのを今、ホームページで拝見したら、先ほど来課題として挙がっていた部活動の補助についても書かれてありました。つまり、吹奏楽とかサッカーとかに関してサポートしてくれる方がいれば登録してくださいというような、こういった内容もあったんですけれども、まさにこのあたりが、武蔵野市でつくっている仕組みの中で、今回活用できるような内容なのかなと思っていまして、武蔵野市では、恐らく市側ができるのは、より多くの人に登録を促すような仕組みづくり、私はこのシステム、承知しておりませんでしたけれども、例えば市報に出すとか、しかも、これを見ると、メールで問い合わせたらフォームが送られてくると書いてあったんですけども、これはユーザーフレンドリーではないと思うので、QRコードで読み取れば登録ができるとか、そういったより簡便な仕組みをつくってもらおうとか、先ほど来話があったとおりですけども、こういったことで登録しておけば、話ができれば、地域に貢献できるということは、恐らく地域住民からすると喜びになると思うので、非常にうまくいくような気がしたので、何らかフーカスするもの、例えば部活というのをフーカスして取り組まれたら解決しそうな気がしました。

【委員長】

具体的に話していただきまして、ありがとうございます。

プラスの例ですね。大変恐縮なんですけど、今、おっしゃっていただいたように、当委員会はその話をいただいて、もしよろしかったら、今のような件について、松田委員からもしお気づきの点とか、こういうシステムづくりは今のような例があるんじゃないかというご提案があればいただければありがたいんですけど、その後に4人の学校関係者の先生に、こういうふうに学校は考えているよというようなことがあれば、うまく話がかみ合うような気がしますので、4の課題について、システムづくりやモチベーションの持ち方でご意見ありましたら、お願いいたします。

【委員】

私も学校支援協力者リストについては何も知りませんでした。結構市報とかも読んでいると思ったんですけど、一度も聞いたことがなかったので、先生方用のものかもしれないですけども、地域の方のほうにももう少しわかるようにしていただくと、たくさんの人たちが何らかの形で協力してくれるようなことになるかと思います。

【委員長】

もう少しわかりやすくというご指摘ですが、事務局で何かありますか。わかりにくい状況とか。

【指導課長】

このリストについては、かなり昔からですね。私も副校長のころもずっとありましたので、長く続いているものです。これについても、使いやすいように、推進室のほうでもかなりリニューアルをして、現在も見やすくなっているところでございます。先ほどありましたように、年に1回だけではございますけれども、2月に市報に掲載させていただいて、登録を促しているところでございます。事務局としてもこれを活用していただきたいというふうには思っているんですが、現状としては今、いろいろご指摘いただいた状況でございませぬ。

【委員長】

ありがとうございます。これは活用できる方向がありそうですね。もうちょっと広く知られるような形でやると非常に効果的なのかもしれません。

【委員】

市内の小学校のあそべえが立ち上がるときに、学校施設開放ということで最初は運営さ

れていたんですけども、あそべえが立ち上がったときにも、こういう地域の方の力を使いましょうということで、けん玉が得意な人、お手玉が得意な人とかお手玉をつくれる人とかいうので名簿をつくった覚えがあるので、多分、それもこれと同じような感じで使われていたんだと思うんですけども、そちらのほうはあそべえのところでイベントを行うときに、その方たちに協力いただきましょうということで始まったと思うんですけども、そのころから多分続いているのかしらと思いました。

【委員長】

実績がありますよね。ありがとうございます。いい提案をいただきました。

【委員】

私もかなり前に学校の授業で、昔、使っていたものを子どもたちに体験させたいということで、たらいと洗濯板を使った洗濯の仕方を教える授業の手伝いを依頼され何名かで参加しました。子どもたちは昔のことを知らないなので、たらいに水を張り固形せっけんえ洗濯板を使って洗う工程を冷たいと言いながら体験しました。学校は地域の人を活用し、地域の方は授業を通して子どもたちとのふれあいで、とても良い交流が出来たということがありました。

【委員長】

具体的ないいお話をいただきました。それぞれ、このことも考えられそうですよね。

【委員】

15年ほど前、私の長男が小学校に入ったころに校長先生から、おやじの会をつくりたいんだと、お父さんたちの力をかりて、学校内、地域で活躍できる場をつくりたいんだということで、校長先生が何人かのお父さんに声かけて、ちょっと話し合いをしたことがあります。それがきっかけになりまして、おやじの会ができて、そこから、今も続いているんですが、毎年運動会では、先生方が用具出しとかライン引きとかが大変なので、用具出しとかライン引きとかそこら辺をお父さんたちが手伝うようになった仕組みができていて、今も続いています。保護者にお願いできる1つのいい事例なのかなと思っています。また、そのおかげで、お父さんが学校関係、地域関係にかなり出るようになったので、その結果、青少協とか地域の子ども会の活動とかもお父さんがかなり出るようになって、もちろんジャンボリーもお父さんたちもかなり参加してくださって、そういう意味では、なかなかお父さんというのは出てくるのが難しいんですけど、そういうおやじの会をまずきっかけにして、学校の活動、地区の活動ができたというところでうまく回っているので、いい事例かと思います

ので、それも初めは校長先生と保護者、地域が同じベクトルを向いていた。おやじの会をつくって、お父さんたちの力をかりてやっていこうという、ベクトルが同じだったことが功を奏したと思いますので、そういうベクトルづくりというのが、また、同じ方向を向いていかないとそこは実現しないので、そういうところでやっていったらいいなと思っています。

【委員長】

今、お話しいただいた例も、モチベーションづくりもいいし、方向性の向き方とか、そういう面では非常に具体的な例で、おやじ同士でもすごく仲よくなって、自分の子どもの成長を見届けられますよね。ありがたい話をいただきました。

【委員】

2年前まで地域コーディネーターをしていたときに、学校支援協力者リストをいただきまして、活動に何か生かせるものはないかなと思ったんですけど、なぜか学校の要望と合うものがないのと、具体的に学校のほうで要望があるというのは直前が多いんですね。そういった時間的な制約が多くて、これを利用することができなかったというのが私はすごく残念に思った覚えがあります。どうしても先生方が、今も多忙化のことをお話しになっていまして、年間を通じてこれがこのあたりにあるとかそういったもので地域コーディネーターとしては把握したんですけど、どうしても、今、コロナ禍のこともあると思うんですけど、長期的な計画があれば、もうちょっと活用できるのではないかなというふうに思いました。

【委員長】

学校の行事以外に長期的な地域と一緒にあった計画づくりというのにも必要になってくるんですね。ありがとうございました。

【委員】

学校支援協力者リストは地域コーディネーターには配られているので、皆さんが知らないということを知ってびっくりしています。この件についても、実際に使われているかどうか、使われていないのが多いという、そんな感じがするんですね。逆に先生方に使われていますか、何が使いづらいですかというところをお伺いすると、これは前に進むのかなという気がするんですね。

そんな気がするのと、もう一つ、ちょっと違う視点なんですけど、先ほど委員の言われたボランティアという活動で一番大事なのは、お互いに感謝の気持ちじゃないかなと。やってもらって、そのままというのが結構あるように見えるんです。本当にありがたいという感じがボランティアの人に伝われば、またやろうという気持ちになってもらえるんじゃないか

な。そういう面も含めてこういうものの仕組みができてくると、ハートの問題になりますけれども、続くんじゃないのかなというふうに思います。

【委員長】

地域のリソースの使い方ですね。これはぜひどなたか学校関係の皆さん、お答えいただくとありがたいと思います。

【委員】

前回のこの委員会の中で、保護者の方もいろんな考えの方がいらっしゃって、自分の子どものことで精いっぱい、ほかの子どものためにとか学校のためにというのはなかなか考えにくい方もいらっしゃるんじゃないかというご意見があったかと思いますが、保護者の方に協力を呼びかけるときに、学校のために何かしましょうとか、ほかの子どものために何かをしましょうという呼びかけ方だけだと、やっぱりハードルが高くなってしまうので、今回の学校支援協力者リストみたいに、保護者の方もそれぞれお仕事だったり資格だったり、もしかしたらプロのような何か特技をお持ちの方もいらっしゃると思うので、そういうところで学校だったりほかのお子さんのためにできることはありませんかみたいな、呼びかけ方の工夫は1つあるといいのかなと思います。

先ほどおっしゃっていた、学校から直前の依頼が多いというのは、引き受けたいと思っていても、もう既に予定が入ってしまっていたりということがあると、なかなか時間の面で、都合の面で引き受けられないところもあると思うので、その辺の予定みたいなものは学校のほうにも協力いただいて、なるべく何か月か前とか、それか候補日を幾つか出していたらどうか、そういう形でお互いにできるといいのかなと思いました。

【委員長】

呼びかけ方の工夫ですね。ありがとうございます。

【委員】

行政的な視点で、担い手のところですけども、先ほど委員がおっしゃったおやじの会などの活動は、多分、きっかけだと思うんです。そういった地域は、非常に盛り上がっているというか、まとまっている。恐らくほかの地域でもそういう人たちはいるのかもしれないんですけど、そういうきっかけがなくてそういう仕組みができないということもあるので、行政としては、うまい事例を参考に他の地域に広げるような何か仕掛けができないかというのを少し検討していく必要があるかなと。地域性があるので、それも見た上で。

あと、以前、PTAの話をしてはいますけれども、このコロナ禍で、昨年もPTAの代表の

方々から要望書をいただいていた、意見交換会をしました。ウェブでやったのですが、すごい数の方が参加されていました。ですので、PTAの活動もウェブを利用した、例えば学校に来るのは非常に負担感があるけど、家でウェブでPTAの会議をやるならできるとか、今の時代、ICTを使った会議の形式とか、あと、事務分担もそうですし、そういうのに長けた方もいらっしゃるの、家でそういう作業をしてPCで展開とかというやり方もできるので、PTAの活動も負担のかからないやり方を工夫するなど、少し参加しやすい環境を整えていくとかという視点も必要なのかなと思っております。地域で待っているという段階ではないので、行政としては地域の方たちと相談しながら、何かうまい担い手の仕組みについて仕掛けができないかということ、地域の方の支援をおかりしながら考えていく時期なのかなとも思っています。

【委員長】

ICTの活用とか、今、非常にタイミングがいい気がしますよね。新しいし、きっかけづくりのヒントがあるような気がいたしました。ありがとうございます。

【委員】

私も今の委員のお話と通じるところなんですけれども、いろんなきっかけをつくっていくために、こういうリストみたいところに登録していただく方をより多く集めるための登録をプールする仕組みと、あと、なるべく多くの人たちに登録していただくためのきっかけをつくって、きちんと学校側のニーズとマッチングするための仕組みですね。ご協力いただける方、若い世代の方ですと、ICTの親和性というのは高いと思いますので、そこを一定ICTを活用する形の方向性で整備していけるような、行政としてもそこを考えていけたらいいなと思います。

あと、そういった仕組みが成り立つ前提としては、先ほど副委員長がおっしゃられた、関係者、地域全体が同じ気持ちで、同じ方向性で地域で子どもを育てる、その気持ちを共有するということが大切だと思いますので、そこは地域全体で子どもを育てるとい、ある意味、責任感の共有というところだと思いますので、責任感の共有というのを一緒にしていけるような制度的な仕組みというところも必要なのかなというふうに思いました。

【委員長】

責任感の共有だとかそういうことの仕組みづくりというのは、おこがましい言い方ですけど、行政の担当の部局で背中をぽっと押してくれると、多分いろんな方たちが、学校関係者も地域の専門家の方たちも自信を持つと思うんですね。いわゆるお墨をもらうという言

い方はおかしいけれども、自信を持ってやれる、それは同じ方向性を向く1つのきっかけになるような気がしましたので、今の行政的な視点でのご意見、非常にありがたかったと思っております。ありがとうございます。

学校関係の委員のお話を伺って、答えていただきたい点もありますので、地域のリソースをもうちょっと活用してくれよという意見もありましたので、そこら辺のお答えを含めていただければと思います。今までのことを踏まえて、学校のことをちょっとお話しさせていただきたいと思っています。

【委員】

学校支援協力者リストは私も見えています。ちなみに部活動のことですが、例えば吹奏楽部の楽器の指導って、いろいろあるんですけど、地域コーディネーターが、コーチしていただける方を探してきてくれて、もう何人も登用しているのが現状です。また、他の部活動の指導者のリストを見ているんですけど、活動時間とか学校に合わない部分があって、なかなかうまくいかないところがありますね。

支援者リストの募集要項に、ある学校では、こういう人材を求めているということを書いていいのかわからないんですけど、もしそういうことが可能であれば、示せるといいですね。4時から6時まで、サッカーの指導、年齢は幾つぐらいとか。ただ、問題になるのは、その人と学校の指導方針が合わないと、まずいと思います。例えば、勝利至上主義のコーチが来てしまって、チームワークを大事にしようとする学校の方針と合わないと指導を受ける選手がかわいそうですよね。そういうことがないように先生方と審査ではないですけど、十分なコミュニケーションが必要になってきますよね。そういうことも含めながらやっていけばいいなと思っています。今、吹奏楽部は、新しいコーチが来ていいコミュニケーションがとれて一生懸命やっていますので、いい感じだなと思っています。だから、そのようなシステムを具体的につくりたいですね。

先ほど、他の委員も言っていましたけど、例えば地域の企業のスタッフを派遣してもらったりとか、そうすると、ある1つのスポーツのプロというか、そういう人たちの指導を週1回受けられるとか、そういうふうになると、子どもたちはすごい目を輝かせるんじゃないかなと思うんですね。教員もちろん見に行くと、自分たちもスキルアップできるかもしれない。企業とか地域の大学生という、市内には武蔵野大学とかいろいろな大学がありますから、大学の中でも派遣していただけるようなことがあればいいですね。歳が近いとちょっと違うトラブルが出てしまう場面もあるので、その辺は簡単にはいかないと思うんですけど、例え

ば企業のスタッフでしたら、きちんとそういうところはわきまえていると思うので、子どもを指導するにはどうしたらいいとか、卓越している人たちがいっぱいいますから、そういう人たちからの指導というのも望んでいます。このように学校支援協力者リストをもっともっと登録しやすいようにするすべはないかなというのは私も同感です。そうすると、私の言っていた2つのうちの1つが解消されていって、少し仕分けができる。もちろんやりたい先生にはやってもらいたいですけど、ちょっと苦勞なさっている先生にはうまく支援ができると思っています。

【委員長】

企業だとか大学のスタッフを活用するというのは、非常に専門性も高いし、いい部分がありますよね。非常にわかりやすい話でした。ありがとうございます。

【委員】

学校支援協力者リストのところからつなげていくと、先ほどの委員もおっしゃっていたように、なかなか学校で使われないと。なぜかなと思ったとき、いろいろな要素があると思うんですけど、1つに、私の場合は地域コーディネーターにまず聞くのが早いということと、信頼できるということ。地域コーディネーターが紹介してくれる人だから、地域のこともわかっている方だったりするので、その人だったらできるでしょうということにつながりやすいところがあるので、猫の手も借りたいというか、本当は急ぎのときとかはこうやってリストの中から探すということはあると思うんですけども、そうじゃなくて、ある程度、余裕があるときとかだったらば、信頼できる人からまず当たっていきたいというところがある。そうになると、コーディネーターに誰かいませんかということがあるかもしれない。ただ、余裕があるというのが1カ月前とか、一般常識から考えると、結構ぎりぎりじゃないですかということがある。これは教員の働き方の感覚というところを研ぎ澄まさせていかなきゃいけないなというふうに思います。

若い教員とか経験浅い教員というのは、一日一日の授業に必死になって、気がついたら、あれ、そういえば、今度これがあるじゃないかみたいなことになってしまいますので、そうではなくて、ある程度、例えば3カ月先とか半年先とか、先を見据えた人材ということに、学年主任とかそういったところは持っていく必要があると思います。これは学校の中での教員育成というところになっていくと思いますし、ぜひ市教委のほうにも教員研修のところで尽力いただけるとありがたいなというふうには思うんですけども、そのところがまず1つ感じたところですよ。

先ほどから皆さんのお話を聞いていてすごく思うところは、学校と地域のベクトルを合わせていくというのは大事なことだなというふうに私も思っています。そのために開かれた学校づくり協議会もそうですけれども、ただ単に学校のことを話をするとか、学校への要望を聞くという場ではなくて、さっきから出ていたような、どんな子を育てたいのか、地域の方々はどんな地域にしていきたいと思っているのか、そういったところをじっくりと話をすることのできるようにしていったほうがいいんじゃないかなというふうに思いました。また、持っていき方も大事だと思うんですけど、それをやらされ感の中でやるとおもしろくないなというふうに思うんですね。例えば市教委のほうから、今度から開かれる内容はこれでやりなさいというふうに言われても、多分、何だよという形になってしまうと思うので、なぜそれが大事なところなのかを発信していく。やっぱり私は発信が大事だと思うんですけど、趣旨とかそういったところを発信していくというところとか、もっといえば、こういったオフィシャルな場のコミュニケーションだけじゃなくて、もうちょっとくだけた場でのお互いの人間を知っていく中でのコミュニケーションというのは非常に大事なんじゃないかなというふうに思います。そういった時間をつくっていくというところで働き方の改革というのもまた大事になってくると思いますので、そのときに、先ほどからキーワードで何度か出ていますけど、オンラインであるとか地域の活用というところも、この会議体というよりも、市教委の中でICTの検討委員会なんかもありますから、その中でやっていただければいいと思いますし、そういったことと連動していけるといいのかなというふうに思いました。

【委員長】

モチベーションの持ち方。信頼とか、ちょっとしたあいさつをするとか、そういうことの重要性をすごく感じましたね。そういう意味で同じベクトルを向くという具体的な例をお教えいただきました。

【委員】

今日、参加させていただくに当たって、事前に大変難しい課題をいただいたと思っています。この内容は、学校内でも少し意見を聞いたりしてきました。仕組みづくりだとか、それから、1つ目にある大切にしていきたい機能等、何をしていけばいいんだと。仕組みをつくれれば解決するというのは簡単ですが、考えさせられる部分がありました。私なりの感想も含め、話をさせていただきます。

まず、私は中学校ですので、先ほどからの部活動の話はよく出ています。部活動について

は、多分、教育委員会がよくご存じだと思いますが、今後、令和5年度頃から土日については地域の指導等が段階的に入ってくるという方向性が今、示されてきていると思います。実際のところ、学校では、学校支援協力者リスト等を活用しながら、支援をお願いしたりしながら部活動などをやっています。部活動については、あと1年ぐらいで大きく変わっていく仕組みをつくっていかなくてはいけない内容だと思っています。

それから、今回の4番目の下に書いてある、「これら全体を実現するための仕組みづくり」、これがどうも頭にひっかかっておりまして、新しい組織をつくる、また、既存のものを生かしていくという形です。細かなところだけをつないでいけばいいのかどうか、様々な考えがあって、どうしたらいいんだろうという思いで一杯でした。

そして、4のテーマのところにあるように、きっかけづくりということで、地域や保護者の方々に協力していただく。ただ一方的に協力していただくだけではなく、還元もしていかななくてはなりません。一方的に何かしてもらおうという発想ではまずいと思っています。そういう意味では、参加していただく方がその会に参加して楽しかったり意義があったり継続するために、そういう内容も含めてやっていかなくてはいけない部分も出てきます。子どもという視点は共通の目的にあるにせよ、継続していくためにはそういう組織づくりが必要になるのかなど、そんな思いで考えていました。

それから、本校の例になりますけれども、地域コーディネーターの方からはよく支援していただいています。これはいい仕組みだと思っています。私が過去にいた学校では、こういう仕組みがなかったので、学校が大騒ぎしているような準備をしてきた経緯があります。先ほど委員もおっしゃられたように、今、学校は1人1人の子どもに丁寧に関わっていると思っています。1人1人に合わせた教育を行うということは、教員が1つの授業の中でこれまで以上のプログラムを用意することになります。

現在、本校では、進路指導が行われています。例えば私は今日、何人もの生徒と進路面談を行ってきました。今は、キャリア教育という言葉を使ったりするんですが、1年生では職業を調べたり、働く人の話を聞く会を設けたり、そして、2年生になったら、職場体験があります。地域の職場に生徒が出かけていく体験をして、3年生になったら進学に向けた準備をする。このような流れは、過去にはあまり行われなかったことです。このような対応も今、学校では求められている。ただ、そういうことが起きた際、非常に助かっているのが地域コーディネーターのご支援なんです。1年生が働く人の話を聞きたいというときには、コーディネーターの方に講師を見つけていただいています。また、2年生の職場体験では、多数の

職場に子どもが出かけていきます。昔はなかったことですから、それだけ地域の方々にご協力をいただいています。コーディネーターの方がうまく地域の活動を把握した上で地域に出かけていく体制づくりもしていただいています。コーディネーターの方に支えられながら、うまく指導につながられている1つの例として紹介させていただきました。

【委員長】

部活、進路指導を中心に、コーディネーターのあり方、非常に具体的な動きを、学校の様子がわかる話をいただきまして、ありがとうございます。

【委員】

テーマ④の第2回委員意見の4つあるうちの1つ目に、現状として、PTAを持たない保育園を選ぶ保護者もいると書いてあるじゃないですか。ここら辺が根本的に問題だろうと私は思います、はっきり言って。自分の子どもに対して、保護者が時間を割くのは僕は当たり前じゃないのかなと思うんですね。だけど、それを大手を振って言えない風潮が今、あって、確かに私自身も共働きで子どもにかけてきた時間がどれだけあるのかといたら、それは恵まれた立場だからかもしれませんけど、学童の会長をやったり、保育園の何かをやったりとか、でもそれが周りの子どもたちともつながって、すごく楽しかったということもあるんですけども、本当にできないのかと、本当に余裕がないのか、そして、学校にいろんなことを任せてしまう。例えば、あそべえというのがありますけれども、あそべえはもちろん学校とは違うんだけど、学校の敷地の中で行っていることであって、学校というイメージのものにいろいろなことが任されてしまっていると、それが当たり前だと思ってしまうと。私は武蔵野の保護者の方はとても恵まれていると個人的には思っています。だって、朝から子どもが遊ぶ場を保障されて、放課後の学習教室なんてあったりもしますし、そして、5年生では6泊7日の旅行に連れていってもらえるわけですよ。これも全然当たり前じゃないと思うんですね。そういうところからもう一回出発しないと、今、協働したいと考えている地域の方、保護者の方もいらっしゃるんだけど、でも、地域の方は特に多いかもしれないですけど、本当に保護者はそうでしょうかというところなんですよね。協働までいなくても、これは学校もです。地域もちろんそうで、保護者の方も家庭もまずやるべきことをやらなきゃいけないんじゃないのというのをいよいよ言っていかなきゃいけないんじゃないのかなと最近思っているところです。

その部分の議論は必要だろうというふうに思います。その方策として、1つはどういう子どもを育てたいかというのは、本校でもコロナの関係で昨年随分保護者の方とかとお話

をする機会もありましたけども、そういうのを話をすると、お互いに理解できるところもある、あるいは応援をいただけることもあるというのは1つのきっかけになるかなと思っています。

それから、学校支援協力者リスト、私も実はしっかり読んだことはないんですけども、先ほど委員がおっしゃったように、地域コーディネーターの方にご相談して、大体、本校の教育活動の部分というのは、それで賄えちゃったというか、協力していただいたんですね。今までは本校で長くやっていただいた方から今、新しい方にかわられて、前もお話はしたかと思えますけれど、得意分野が違うわけですね。新しい方になって新しくアクティブに学習が進められる方あるいは組織をご紹介いただいて、すごくよかったと思っています。一方で、この間、6年生の日光からの帰りが土曜日だったんですが、土曜日に学校の前にバスを停めるのが難しいよねということで、最初は遠いところにとめて、よっこら、よっこら荷物を持ってこようと言っていたんですけど、以前のコーディネーターの方が、僕が交通整理するから大丈夫だよというふうに言ってくれて、当日、棒を振って交通整理をしてくれるわけですよ。ですから、本当に学校のことを思ってそうやって動いてくださる方もいらっしゃる。

行政のほうには、地域コーディネーターというのは、学校によって様々な特色があるし、地域性もあるから、うちの学校はできれば2人体制にしたいなと思うし、それから、違う学校では1人でいいよというかもしれないし、3人がいいよというところも。そのあたりを、これはお金のことが絡んじゃうんだけど、柔軟に対応していくことがいろいろな面で、これはコーディネーターのことを言いましたけど、ほかにもたくさんあると思います。

私は、この2年間、いろんなことが計画的にできなくて、その場その場で歩きながら、走りながら考えてきているけど、結局、今までと違う形になったけど、結果としてはそっちのほうが教育的効果が高いとか、あるいは今までかけていた労力とか時間だとか、そこまでやらなかったけれども、子どもたちも成果としてはよかったんじゃないかということもたくさんあるんですね。だから、ここはすごく学校の変わり時だと思っている、これからどんどんそういうふうになってくるんじゃないかと思っています。

そういった意味で、時々これが話題に出るんですけど、学校から何カ月も前からお願いするということもあると思うんですけども、そうじゃないほうがよい教育活動ができることが多いですね。つまり、最初の部分は、ある程度、この方を紹介してもらって見つけてみるというのはあるけれども、その後、子どもがどういうことに関心を示したり、ここで追究していきたいとなったときには1週間前だったりすることも確かにあるんですね。教員の

進行管理が悪い面も確かにある部分はあると思うんですけど、本質的に子どもがやりたい活動というのは、何カ月も前からはっきりと形づくられているものであると、どうしても教師がルールを引いてしまう活動になりがちだということなので、ここはやっぱりご理解いただくしかないのかなというふうに思っています。

そういった意味で、学校支援協力者リストは、使える部分もちろんあると思うんですけど、全面的にこれに頼るといことがないというのは、そういうところなのかなんていうふうに思っています。

ちょっと何とも言えない意見でしたけれども、よろしくお願いします。

【委員長】

当たり前を見直す仕組みづくりとか、そういう具体的な方向性まで見通して、わかりやすくお話をいただきました。

【委員】

私は学校支援協力者リストにがん教育で毎年エントリーしていますが、一度も活用されたことはありません。

先ほど委員がおっしゃった外部指導者のやつ、私も本当にそうならいいなと、サッカー一部に関しては思っていました。別の委員がおっしゃった令和5年度までにとというのは、スポーツ庁のガイドラインで、その中にオンラインもぜひ活用してということが書いてあるので、わざわざ交通費を払わなくてもオンラインでサッカーを教えてくれるみたいなのも現実的だなと思いました。

私が1点申し上げたいのは、今までの議論というのは、多分、学校、家庭、地域と言っておきながら、全然トライアングルになっていなくて、学校は地域と家庭のハブになっている感じがしませんか。恐らく地域と家庭がつながるとすごく強力なトライアングルになるのかなと思っていました。

P T Aの今度の新しい役員の人と相談しているんですけど、次年度北海道の今金町という高齢化がすごい地域があるところでの取り組みをまねしようと思っているんです。毎朝、子どもたちが学校に登校するときに独居の高齢者のうちに寄って、ごみを捨てるものは何かありませんかといって寄っていく取り組みがあるそうなんです。そういうのをやれたらいいなと思うんですよね。ですから、保護者の中にも、ママ友ですけど、サッカーが強い会社に勤めている社員さんもいるし、既に若くして地域の青少協に入っているお友達もいるし、結構地域のことを知っている保護者もつながっている保護者もたくさんいるので、そこ

が繋がれたら、すごく強力な子どもを育てる体制ができるのになと思っています。

【委員長】

ありがとうございます。家庭、学校、地域がいかに、学校だけがハブじゃなくて、家庭、地域という視点ですごく新鮮に聞こえました。

【副委員長】

ご議論、本当に参考になるところがたくさんありました。

私からは1点だけ。今、ここでやっているような議論を本当は皆さんが共有するのが一番大事だと思っているんです。要は、教員が多忙化と言われても、正直言うと、家庭の皆さんだって、私も忙しいんですよとおっしゃるわけです。今の時代、誰もが忙しくなっているところがある中において、できれば誰かにお願いしたい、お願いしたいというのをお互いが思っているわけですね。それはそのままだと、お互いが押しつけあって終わるだけになってしまいます。こういった議論を学校づくり協議会でもいいですし、それこそコミセンでも、武蔵野市は地域フォーラムみたいなものもありますので、そういった場でもいいんですが、そういうところで多様に共有していくことが重要です。

というのは、例えば先ほどジャンボリーのときに教員が手を引くときにびっくりしちゃったし、問題になったという話がありました。すごく気持ちはわかるんです。すごく気持ちはわかるんですが、同時にそれは学校や地域がどういう変化にさらされているのか、というのをお互いが共有していないので、何かすごいことが起きちゃった、これまでのようにできなくなっていくんじゃないのかというようにどうしても思ってしまう。ここでいうシステムあるいは同じ方向を向くというのは、皆さんが同じ価値観に染まることでは多分なくて、皆さんがお互いの状況を理解しながら、だけど、できることは何なのかということをしり合わせていくような仕組みとか仕掛けというのが恐らく必要で、多分、今、ここで議論しているのは、学校も家庭も地域もそれぞれがそれぞれに抱えている課題がある中で、お互いのことを想像できるようにすり合わせていきましょうということです。そうすると、これまで学校がやってきたことを本当はもっと期待したいという親御さんもたくさんいると思うんですね。あるいは地域の方にもたくさんいる。だけど、これはできないのかもしれないというふうに諦めたり、要望を変えたり、あるいは形を変えるということをお互いが理解できるようになっていく。学校というのは、何かを諦めると、ものすごく批判を受けるので、そのように変化すると批判を受けるのは嫌だというのはよくわかります。だけど、そのために全部受け入れてきて、今、大変なことになっているので、そうじゃなくて、お互いがお互いの状

況を知ることができる、想像できるような仕組みというのを我々が考えていくことが恐らく重要です。一応、今のところ、開かれた学校づくり協議会、本来はそういうような運用をしていくべき場所なので、それをどうできるかということを我々は考えていく必要があるのかなというふうに感じました。

また、そのほかに、本当にいろいろな具体的なお議論もいいところもたくさんありましたので、ぜひ次回以降に、何が本当に共有できるかということも皆さんでしっかり議論できればと思いました。

私からは以上です。

【委員長】

ありがとうございます。時間を大幅に過ぎていて申しわけないですけど、特に仕組みづくりという点で、僕は非常にいい議論ができたように思っています。

私のほうから3点、仕組みづくりのときの私自身の心構えみたいなことなんですけれども、三者が連携していった仕組みをつくる時に、4つの「い」が大事だという気がしますね、形容詞の「い」なんですけど。どうしてもおもしろくなくちゃいけない、おもしろいということ、それから、楽しい、うれしい、またやりたいということ。おもしろい、楽しい、うれしい、またやりたい、このニュアンス、先ほど来議論があるように、感謝だとか信頼だとか、そういったモチベーションが1つの方向に向かうということが重要なんですね。そのときに、私たちがかかわっているそれぞれのものが4つの「い」をどの程度味わえるかということがないと、前向きに進まないんじゃないかという気がするんですね。それが1つ。

それから、2つ目は、子どもの発達というのを考える必要がある。とりわけ幼児から中学生、高校生ぐらいまで我々対応するわけですので、それぞれの発達によって全然対応が違うわけですね。地域のボランティアを使ったり、学校支援協力者リストで協力者にお願いするにしても、全然違うので、子どもの発達とか子どもを知るということをもう少し我々も考えていかななくちゃいけないし、学校の実情を踏まえながら研究していく必要があるかなというふうにちょっと思っている点が2つ目です。発達の視点ですね。

それから、3つ目は、それぞれお互いに専門性というか、私はお互いの専門を生かすことが大事だというふうに思っているわけですけども、そのときに、専門にある種の価値観的にでこぼこがあっちゃだめだという気がするんですね。どこかの人が、偉いから私たちはちょっと引っ込んじゃうということがあるんですね。そういうふうな関係になるとだめだと思ってしまうんですよ。そのところは同等というか、発想を同じ方向に向くためには同じ土俵に乗

る必要がある。それを見て、お互いにいろんな意見を言いながら、あるいは価値観が、時にはガチで議論があってもいいと思うんですよ。言い方は悪いけど、ののしり合いみたいなことがあってもいいかもしれない。そういうことを乗り越えていかないと、こういうものはまとまっていかないというふうに思うんですね。そういう意味で、仕組みづくりをするときの三者のかかわりようというのが、どうしても今までは、学校がハブになり過ぎていて、言葉はよくないけど、学校の言うままに引きずられているところもないわけではない。そういう意味では、三者が同等のレベルに立ちながら、お互い尊重するということが基本的に大事なわけですので、それをベースにして、信頼しながら、お互いの専門性が生かされればいいというふうに思っています。

今日は30分過ぎてしまったんですけども、本当に申しわけなかったんですけども、自分の気持ちとしてどうしてもこのあたりはしっかり見つめたいなというふうに思ったものですから、皆さんにご無理を申し上げました。本当に協力いただいたことをありがたく思っております。

そして、最後に言いたいのは、事務局の方はすごくよく整理されていて、そういうのは非常にありがたい。いい仕組みづくりというのは、事務局の人が客観的な目で見ただけかなと、やっぱり我々の専門性も生かせないところがあるんですね。そういう意味で事務局の方に感謝申し上げるとともに、皆さんの議論に感謝申し上げたいし、私も委員長としてのわがままをうんと反省して次回に取り組みたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

以上で事務局のほうに司会を返します。ありがとうございました。

【指導課長】

それでは、委員の皆様、長時間にわたりご協力いただき、ありがとうございました。事務局からもおわび申し上げます。

事務局から連絡事項をお伝えいたします。

次回の委員会についてです。次回の委員会は令和4年、年が明けて1月27日（木曜日）の開催を予定しております。時間、会場ともに本日と同様、午後6時からこの会場で開催する予定です。開催のご案内や資料については後日お送りさせていただきます。

本日ご協議いただいたことを踏まえた仕組みについて、次回事務局のほうから少し提案をさせていただこうと考えておりますので、またそれに基づいて忌憚ないご意見、ご協議をお願いしたいというふうに思っております。

最後に、この委員会に関しまして、何かございましたら指導課教育推進室までお問い合わせをお願いいたします。

事務局からは以上です。

4 閉 会

【委員長】

では、どうもありがとうございました。これにて第3回の検討委員会を終了したいと思います。皆さん、本当に遅くまでありがとうございました。

(了)